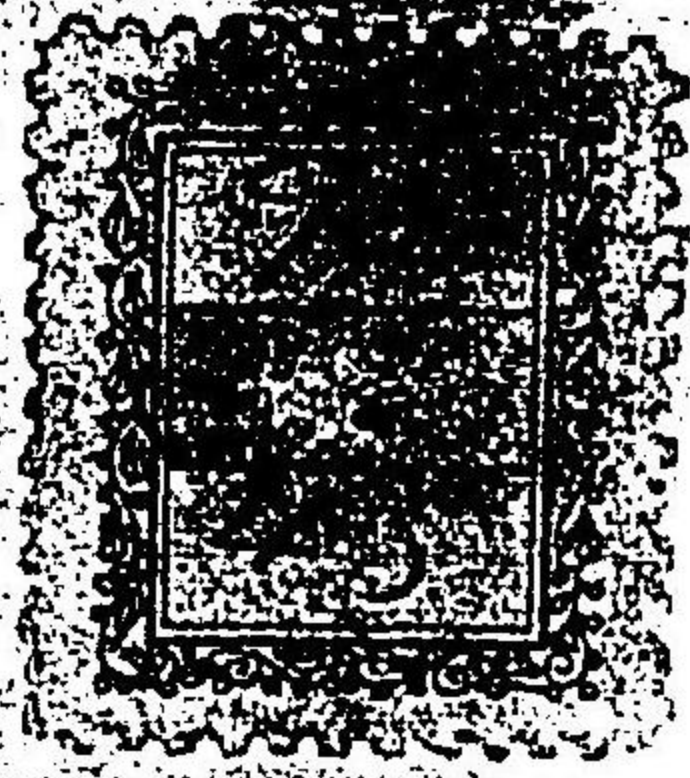


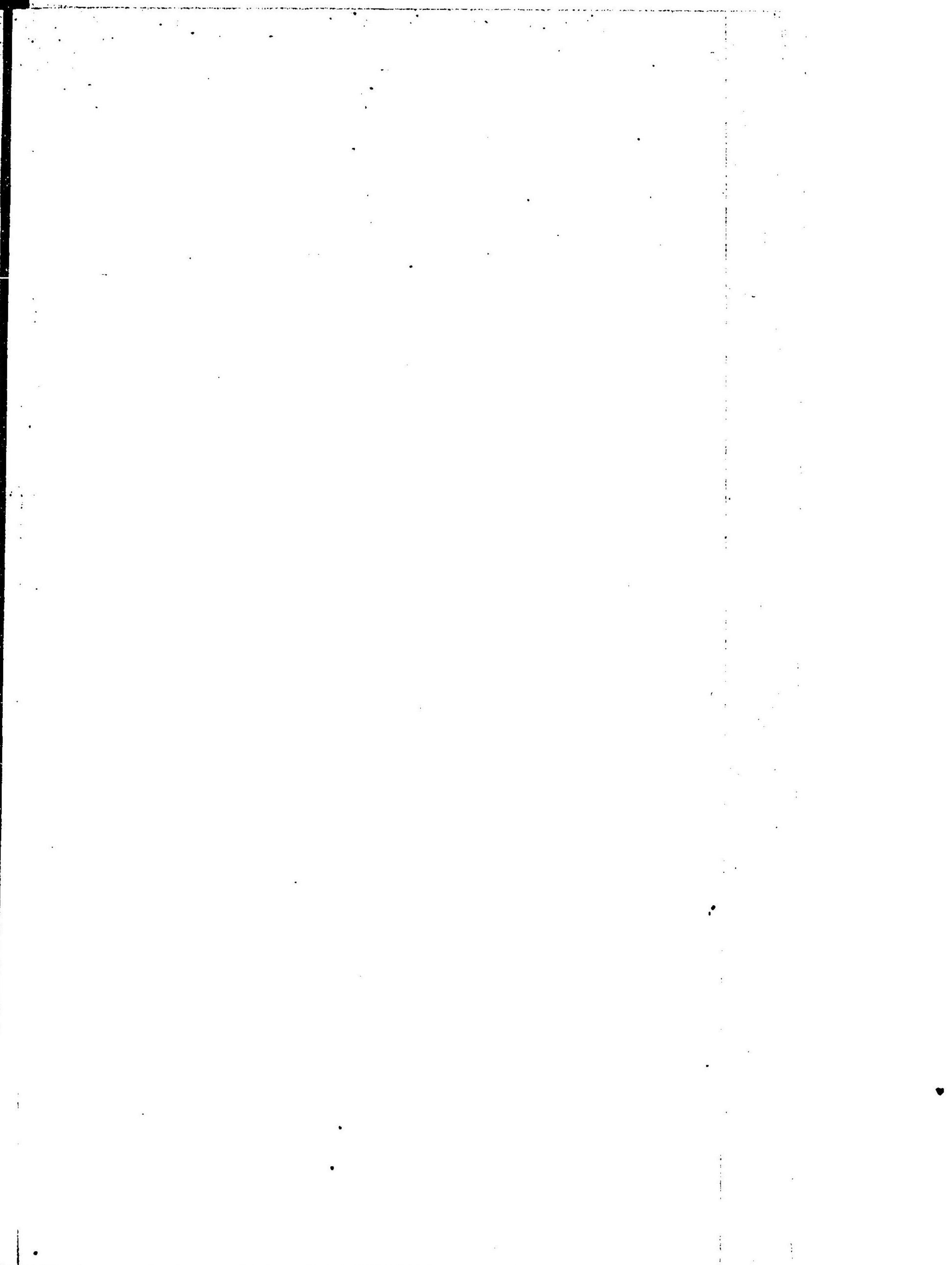
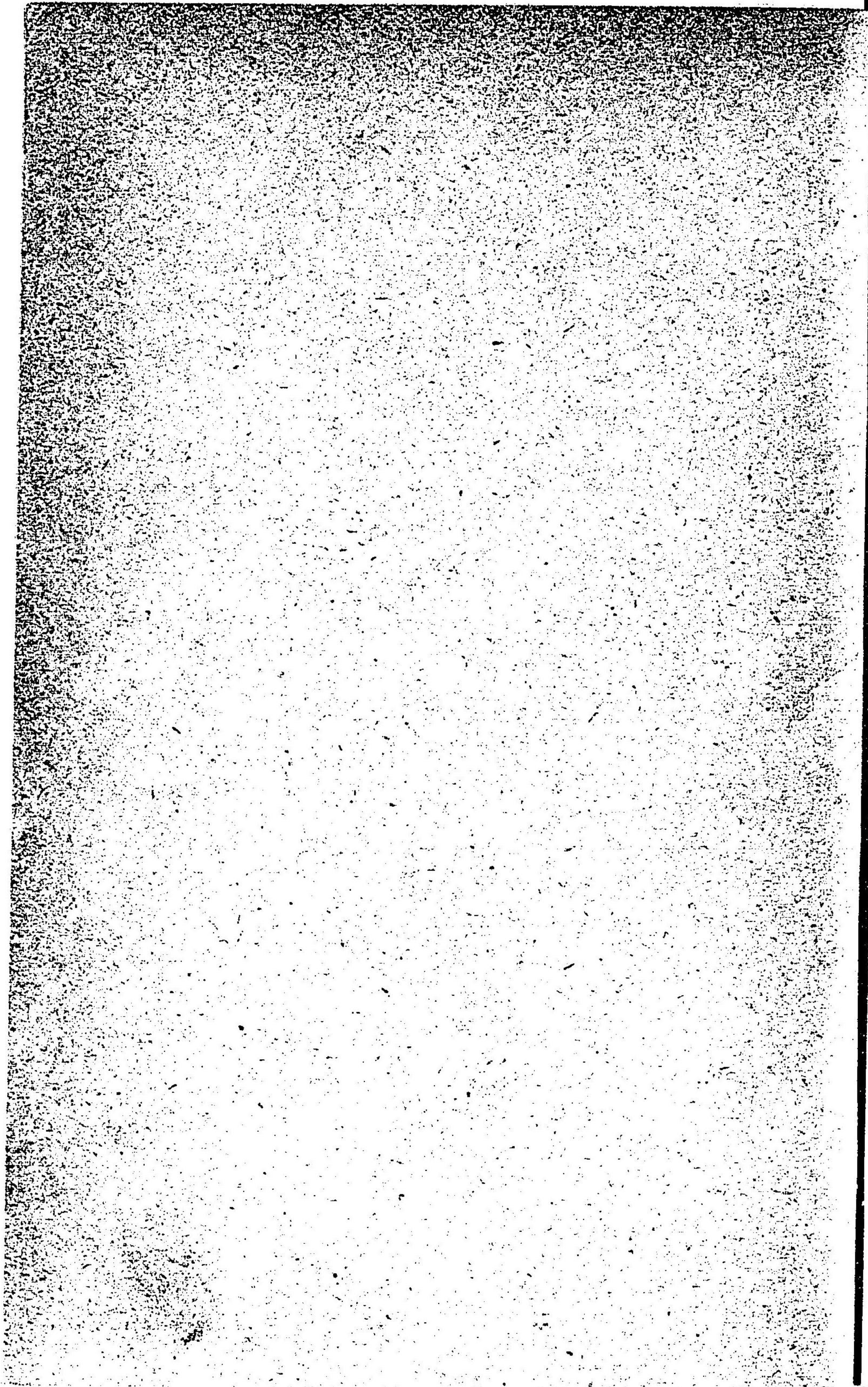
斗 2P49

64

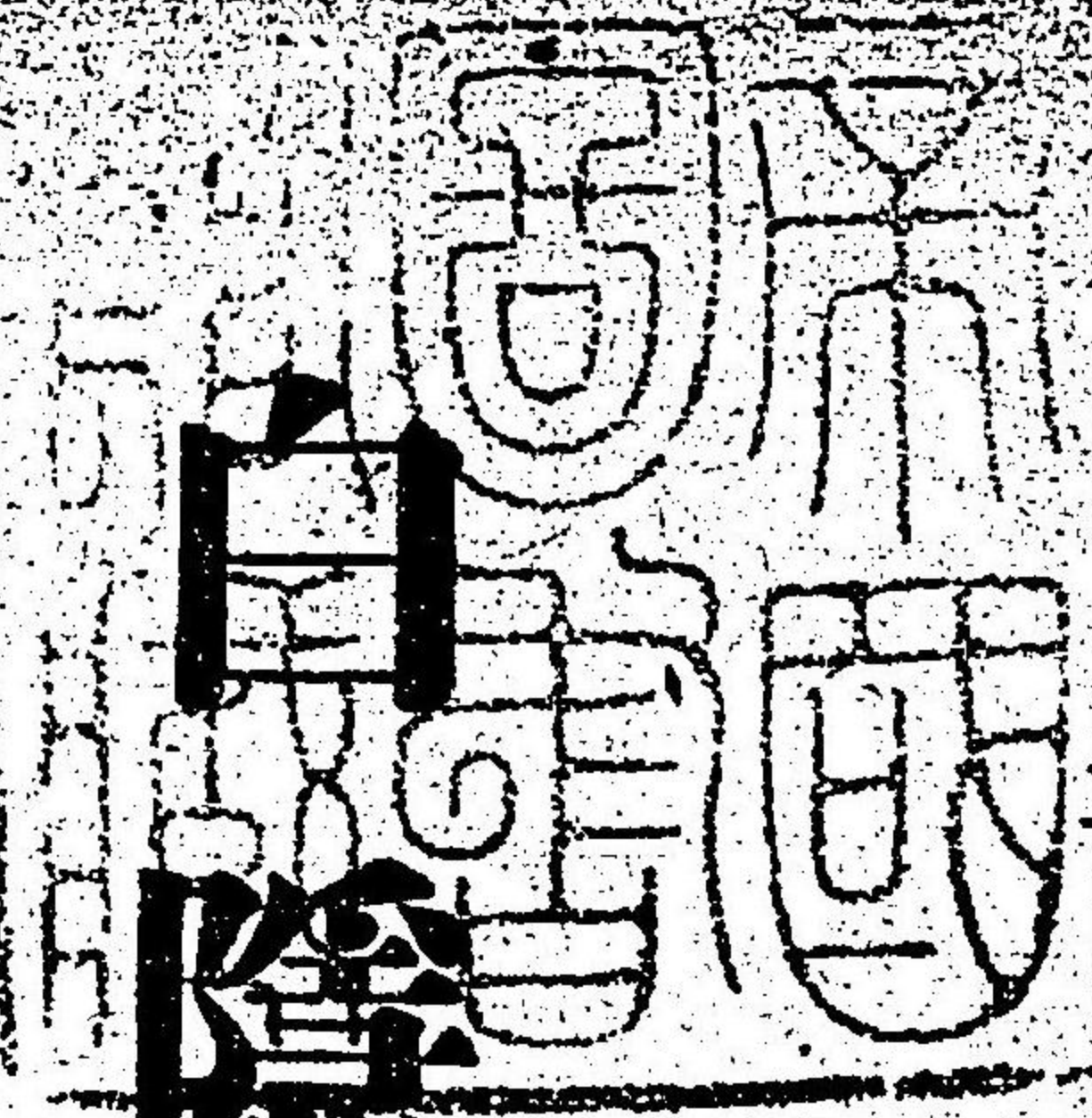


白隱和尚言行錄

×



95-45



服部 俊崖 編著

自隱和尚言行錄

東京 内外出版協會

明治 43.10.12 内交



白 隱 禪 師

序

昔關山禪師の三百年忌に際し、愚堂偈あり、曰はく、二十四流日本禪、惜哉大半失其傳、關山幸有愚堂在、續焰聯燈三百年。と。大愚見て曰はく、大愚亦在り、何ぞ幸に愚堂の在るありと云ふを得ん、と。愚堂笑うて首肯し、第三句を改め、關山幸有兒孫在となしたり、と。當時二老僧の意氣大に壯なるものありと雖も、抑も亦天下の叢林の凋落を想察すべきに游らざるや。

蓋し室町時代の末期以後、五山十刹尙ほ輪奐の美ある
禪の宗風漸く地に墜つ。江戸時代の初期に至り、海内
の禪、愚堂大愚の二人に歸す。愚堂の後、至道を経て正受
飲山に韜晦し、所謂二十四流日本禪の中、僅に其傳を失
はざる南浦宗峯關山の一流、亦宛も縷の如し。
是時に方り、猛然として起り、空手以て臨濟正宗中興の
大業を成したる者は白隱なり。江戸時代の中期、人心沉
滞の間にありて、宗教界の一角に、この大業を或したる
もの、大に異とすべし。白隱の言行研究せざるべからず。

三圭服部君夙に禪宗史を研究して造詣頗る深し。頃者
白隱和尚言行録を編し余に示す。この一小冊未だ必ず
しも君が全力を傾盡したるものにあらざらんも、白隱
の言行の新に闡明せられたるもの少からず。所謂三百
年來一人の大宗師の面目、自ら躍如たり。讀者之に依り
て得るところ甚だ多し。余乃ち君が勞を謝し、一言を卷
端に書す。

明治四十三年九月

鷺尾順敬撰

例言

間出の資、天縱の才、白隱は實に臨濟宗中興の英祖であつて、古今罕に見るの人傑である。斯の書は其の言行の梗概を成る可く平易に、且つ最も興味が多い様に録したものであるが、頁數の都合に依り、初めに著述略解と弟子畧譜との二章を省畧し、將に印刷に附せんとするに際し、愚堂「至道正受の事跡、夢窓に關する話、禪と念佛の關係等六章を删除した。固より必要な部分は、各所に補充補記して置いたが、尙ほ遺漏なきを保し難い。されど青年諸君が斯の書に依り、其の面目の髣髴を窺ふに於いて、甚だしき缺陷なきを疑はない。

現今白隱傳の著述としては、纔に大崎龍淵氏の『白隱禪師傳』と、森大狂氏の『近世禪林言行錄』中に編載せられたものである。斯の書の逸話の多

二

くが後書に負ふ所あるは書中に明記した通りである。余は特に後書に對して敬意を表し置く。

斯の書を草するに際し、鷲尾先生の指導を仰いだ事が鮮少で無かつた。されど片々たる此の小冊子能く其の高教を満たし得なかつた事を遺憾とする。然るにも拘はらず、先生が余の序言を乞ひたるを許諾せられ、此の襤褸を飾るに、錦繡を以ッてせられたのは、余の惶懼措く能はぬ所である。茲に謹んで謝す。

明治四十三年九月十五日

著者誌

白隠和尚言行録目次

一	浮島原……………	一頁
二	地獄を恐る……………	八
三	香煙真直に立たせ給へ……………	一四
四	出家……………	一八
五	馬翁に學ぶ……………	二二
六	『禪關策進』に撞着す……………	二七
七	書畫を一炬に焼く……………	二九
八	故郷に還る……………	三四
九	半夜の鐘聲……………	三七
一〇	正受老人に謁す……………	四一

一一	飯山城下の托鉢	四五
一二	正受庵を辭す	四八
一三	身火逆上す	五〇
一四	雪花霏々として林葉に洒ぐ	六〇
一五	驟雨車軸を流し泥水脛を呑む	六四
一六	手を出す勿れ	六七
一七	岩瀧山中の隠栖	七〇
一八	松蔭寺に歸る	七二
一九	白隠と號す	七五
二〇	蟋蟀古砌に鳴く	七八
二一	『神社考』を讀む	八三
二二	僧堂を建つ	八六

二三	『虚堂録』を評唱す	九〇
二四	念佛禪を排す	九六
二五	默照禪を排す	一〇一
二六	關鎖禪	一〇五
二七	『十句觀音經』を弘む	一一〇
二八	五位偏正の秘奥を發明す	一一三
二九	一樹を嘗めて全鼎を知る	一二五
三〇	隻手の音聲	一二九
三一	『槐安國語』	一三四
三二	池大雅來り謁す	一四〇
三三	無量寺建つ	一四五
三四	三教一致	一四九

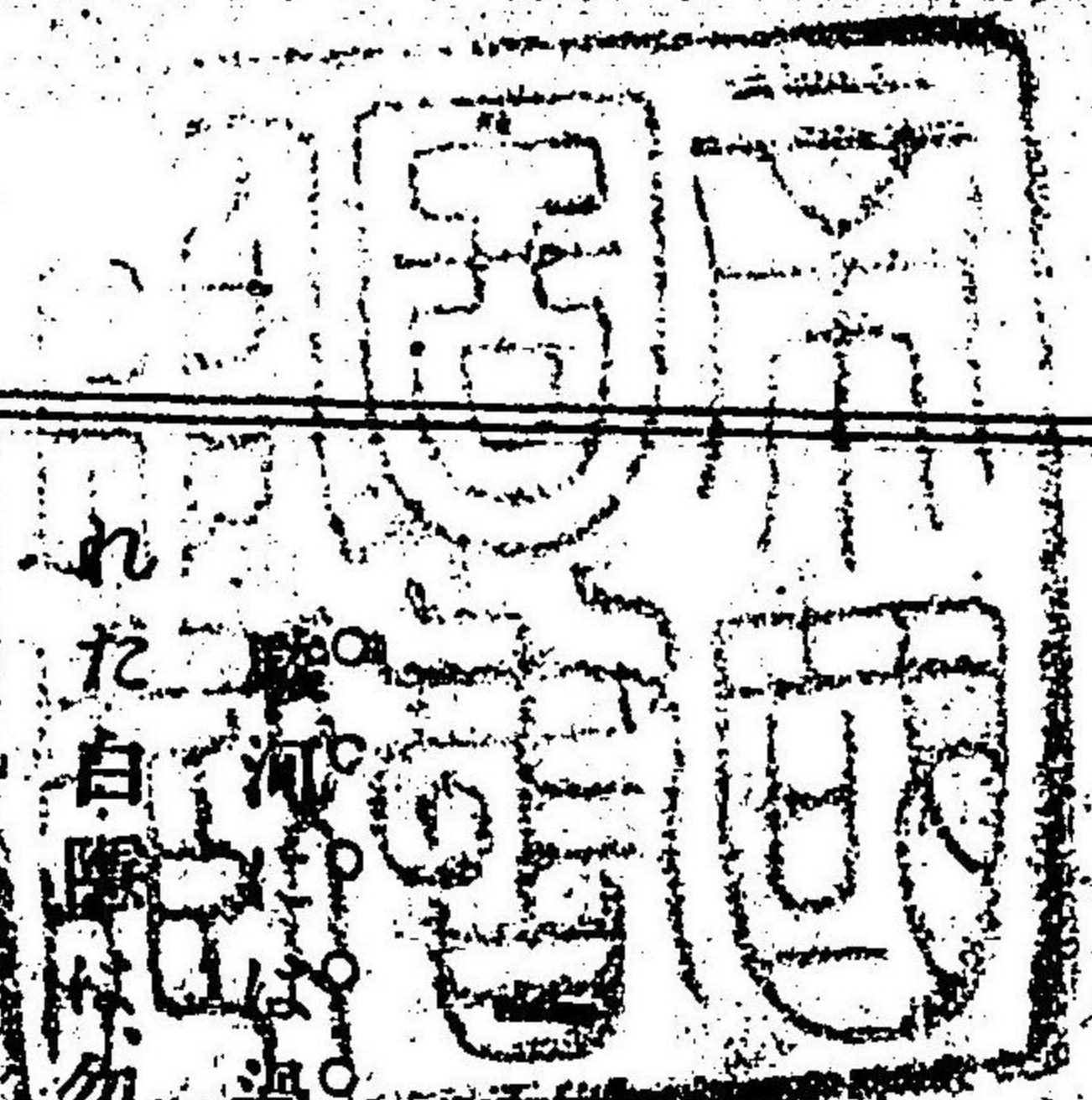
三五	「寶鑑貽照」を著す	一五七
三六	龍澤寺建つ	一六一
三七	清女の木像	一六五
三八	江戸に入る	一七〇
三九	大吽一聲	一七八

四

附 録

一	年 譜	一八四
二	系 圖	一九二

白隠和尚言行録



浮島原

所ある。さらば白隠は何様な所が偉大であつて、何様な所が缺點であつたらうか。彼の弟子の頑極と云ふ者が評した様に、白隠の行業は多く取るに足るものはないけれども、其の修行地の穩密であつたのは、之を古人に求めても、多く得易からぬものであると云ふものか。又鶴林は實

に傑出の宗匠である。他は五百年間出の君子を以つて自ら任じて居つたが實に欺負ではなかつたと云ふものが、兎に角白隠は其の行狀の點では多少の缺點を持つて居つたらしいが其の識見の點では高邁雄偉であつて彼の巍々として雲漢に聳えて居る莊嚴雄大な富士山よりも更に一層雄偉壯大であつたのである。かく駿河の二名物、杏な日本の二名物として富士山と共に隠れのない白隠は抑も何様な經歷を有し、何様な識見を持ち、何様な性行で、其の氣象は何様で、其の才藝は何様であつて、近世の禪林では何様な位置を占めて居つたかと云ふ事は、此の小冊子が讀者諸君に向つて語らうとする重なる目的である。

諸君も知つて居らるゝやうに彼の源行親が其の著『東關紀行』で、
かけひたす沼の入江に富士の根の

白隠の言はふも雲も浮島が原

と謳うた駿河國駿東郡浮島原は、北方には愛鷹山が鬱乎として峙ち、富士山が巍然として聳え、南方には駿河灣が溶々として控へて居つて、朝には峰巒の靈氣に接し、雲煙の氣象に觸れ、夕には滄浪の怒號を聞き、白帆の漂泊を眺めて居る。此の間に生育したものは、是れ等自然の光景に感化せらるゝのは勿論である。又東西に長く伸びた一衣の沼は、富士の山影を倒に浸して居つて、天光と水色とを一碧にし、丁度仙郷に遊んだ様な感を引きさしむるのである。蓋し往昔浮島と云うたのは、原から吉原に亘つて居る一帶の地を稱したもので、其の間には、二堆の小林丘があつて、若し洪水が渺漫として漲るときは、白き水面に青き草野を現はして、丁度漂々たる浮島の様であつたから、斯くは名けられたと云ふことである。それで浮島は古來宛然たる蓬萊の仙郷であるとして、東海道の驛路中でも、有數な勝景であると呼ばれて居つたのであつた。斯様な風

流な仙郷に棲息して居った者は、又其の影響を受けねばなるまい。此の自然の勝景中に生誕し、發育し、生涯を送った者は白隠であつた。

余は浮島に蓬萊の勝があると言うたが、此の仙郷を想像すると同時に、松頭の白鶴を聯想するのである。然し未だ浮島に白鶴が來たと云ふ事を聞かなかつたので何か物足らぬ様な心地がしてならなかつたが、余は茲に端なくも、一の白鶴でなくて、一の神鶴が飛翔して來たと云ふことを發見するに至つたのである。時は文運の隆々として勃興して來た靈元天皇の貞享二年春の頃で、江戸の將軍は五代綱吉であつたが、或る夜立裳縞衣威容凜乎たる一羽の神鶴があつて、口に五十皇篋符を帯びた幣帛を含み、盛勢飛揚翅輪憂然として、當時原驛の驛長であつた長澤氏の屋上に止まつたと云ふことである。此の長澤氏は同驛の杉山氏を婿として鴛鴦の契り陸じく、三男と二女とを擧げた。資性は淳粹善良

であつて、常に慈悲深くあり、篤く神宮や佛寺を崇敬して居つて、一夜夢中髣髴として此の事を感じ、遂に懷妊の身となつたのである。かくて其の年十二月二十五日、鶏鳴の刻に至ると、此の鶴兒は月満ちて呱呱の聲を揚ぐるに至つた。これが本書の主人公白隠の誕生であつたが、後果して長鳴天に唳るの慨があつたのである。

白隠は幼名を岩次郎と呼び、長澤氏の第三男であつて、天資英敏、才氣絶倫であつた。三歳の時、其の足がまだ起たないので、稚な心にも之を羞かしく思ひ、常に起つことを習うて居つたが、一日卒然として起つことが出來たので、歡喜の色は其の顔面に溢れた。之を見て居つた一夫が、あれ、岩さんが起つたと叫んだが、白隠は此の事が非常に嬉しかつたものと見えて、後年まで之を記憶して居つて、時々人に語つたさうである。五歳の時、家の小婢に抱かれて海濱に到り、衆婢等は與に嬉々として戯れ

て居ッたが、彼は獨り濱邊の白き砂の上に坐ッて、遙か南の海の空を望み、浮雲があちらこちらと往來して、隠れつ顯れつ、いと定まらない状態を見て、幼な心を痛く驚かしたものと見え、いかさまかはッたものだと、思ひ、偶然にも世の無常であると云ふことを哀れに感じ、クスリクスリと泣き出したので、小婢は種々に之を慰めて家に歸ッたのである。白隠の沈痛悲愴な心情は、此に其の萌芽を發したものであらう。又天性至ッて強記であッて、曾て村歌三百餘言を誦誦して居ッて、到る處で之を謳歌し、又七歳の時に、寺で法華經の提婆品の講義を聽いて來て、復講して人に聽かせたと云ふことである。其の頃村に体心房といふ奇僧があッて、常に彼の家に來て供養を受けて居ッたが、來る毎に白隠を座傍に置いて、之を愛し、動もすると其の背を撫して、汝は奇骨があるから、必ず世の福田となれよと言ひ、又雪山六年、少林九年と云ふことを能く記憶

して居ると言ひ、其の他修心や養生の秘訣を教へたさうである。修心の訣に

地限場限

と云ふことがある。之は注意を一點に集めて、不斷相續せしむる義であるさうな。又養生の三訣は、

- (一) 食汗の餘は、湯を加へて服すること。
- (二) 蹲居して尿し、立ちて放してはならぬ。
- (三) 北方を慎みて便し、且つ腳してはいかぬ。

と云ふことであッた。白隠は終身此の三訣を服膺して犯さなかつたさうであるが、是れ等宗教的の感化は、すべて白隠の生涯に偉大な影響を及ぼしたものであッた。

二 地獄を恐る

白隠十一歳の時、伊豆の窪金に日嚴といふ上人があつて、當時無類の談義僧として、其の名が高かつたが、或る時、原の昌源寺に来て『摩訶止観』と云ふ書を講じ、聽衆は雲の様に集まつて、頗る盛會であつた。そこで白隠も亦母に随ひて其の講筵に入り、日嚴が精しく地獄の苦しい状態を説いて居るのを聴いた。蓋し『摩訶止観』は支那の天台宗の開祖智顛と云ふ人の説であるが、其の第一巻で十種の發心を説明した。其の第一に地獄心と云ふものがある。

若其心念々專貪瞋癡、攝之不還、拔之不出、日增月甚、起上品十惡、如五扇提羅者、此發地獄心、行火途道。

即ち貪欲と瞋恚と愚癡との三ツが段々増長して來ると、殺生と偷盜と

邪淫と兩舌と惡口と綺語と妄語と貪欲と瞋恚と邪見と云ふ様な十種の惡行をする様になり、因果を信じないで慚愧の情もなく、又業報を信じないで、現在や未來をも見ない、善き朋友にも親まないし、佛陀の教誡にも隨はないと云ふ、極惡無智佛の救に預らぬ、何うにも斯うにも仕様のない五種の闡提と云ふ者となり、遂に等活、黑繩、衆合、號叫、大叫、炎熱、極熱、阿鼻など、云ふ、聞いてもぞツとして、身の毛も彌立つ程恐ろしい、八熱地獄の中に眞逆様に落ちて、無限の苦痛を受けねばならぬと云ふのである。時に之を聞いて居つた、滿堂の老若男女は、皆恐れ戦いて、顔色土の様になつた者もあつたが、白隠の恐怖の情は、それ等よりも一層甚しくあつて、肝膽は共に冷え、心身は震動して、生きて居る様な心地もしなかつた。それから家に歸つても、終夜懊惱して眠らないのみならず、眼中は常に涙を浮べて居つたのである。是は彼の海邊で雲の隱顯出沒極りない

一〇
のを見て哀んだ心情が發展したものであらう。或る時母と共に風呂に入つたが母はいつも湯の熱いのが好きであつたから、下女に命じて頻に薪を焚かせたが暫くすると湯玉が沸々として下から湧き上がり、其の状が丁度怒濤の様で、其の聲が又震雷の様であつたので、忽ち彼の地獄の有様を聯想して、大に恐れ、戦き、風呂桶の箍も切れるばかりに、大聲を揚げて、烈しく泣き叫んだ。そこで近隣の人々は何事が出来たかと皆驚いて走り来り種々に慰めたけれども、聞き入れない時に白隠の姉婿に、丸屋八郎と云ふ人があつて、無類の遊俠者であつたが、忽ち走つて来て抱き起し、高聲に誡めて言つた。泣くなら何んで具さに仔細を告げて泣かないのが平生の氣性にも似合はぬ、女童の腐り果てた様にひた泣きに泣くのは、ソモ何事であるかと。そこで白隠は稍や泣きを鎮めて言つた。然らば母人におのみ告げ申さん。此の大勢の人々を退け給へとは是に

於て人々は皆出て行つたが、後で白隠は獨り忝しく母の前に跪き、兩手を束ねて言つた。湯のどろどろと沸き上る聲を恐る母、どろどろが何で恐ろしいのか、白隠、母人と共に湯に入つてさへ斯様に膽が冷え、股が戦く程恐ろしいのであるから、私獨りで彼の燒熱地獄に落ちたならば、何うして遁るゝことが出来やうか。若し燒熱を遁れる道がないならば、私は安閑として死を待つて居ることは出来ない。母人よ、若し遁れる道を知つて居給ふならば、慈悲と思つて、精しく今教へ給へ。母、此處は風呂場であつて汚らばしいから、明日は清淨の處で、如何にも大切な事を精しく教へて上げやうと。そこで白隠も大に悦びて再び風呂に入つた。先刻の人々が再び来て何事であつたかと尋ねると、母は大切な事で御座ると言つたので、皆は此のくちや、婆々が何の氣もない顔で、と呟いて還つて仕舞つたが、白隠、其の夜は快眠一番して翌朝眼を覺ますと

既に紅日三竿と云ふ時刻であつて、屋後の天神の森では、日頃の朋友が大勢集まつて居て、狂ひ叫び遊ぶのを聞いた。即ち跳ね起き走り出で、之を見ると、鴉三四羽を捉へて来て、互に相争ひ打擲して騒ぐのであつたから、自分も飛んで行つて仲間に入らうと思つたけれども、イヤ待て、我れ家に歸りて母人に見え、彼の大事を傳へ承けた上で、再び来て兎も角もしやうと思案し、急に歸つて母を見ると、母は老醫の市川玄道と云ふ人と世上の物語りをして居たので、白隠は杉戸の陰に隠れて、其の歸るのを待つて居たが、少時すると玄道は暇乞して出て行つたので、母の前に出で、眉を皺め頭を搔いて告げて言つた。母人よ、髪が結ばれて五月蠅い、御苦勞ながら解き梳かして給へ。母、これは、珍しいことで、御座る、御日様も西から出で給ふであらうと、小婢に櫛道具を持たせながら座敷の縁先に出た。其の時白隠は小婢に去れと命じたから、小婢は

キヨロ、四邊を見廻しながら、うろたへて去つたが、後で白隠は膝を屈め、兩手を突き、謹んで言つた。母上、私程罪深き者は、はべらぬ、夜前御約束申した通り、若し遁るゝ道があらば、教へ給へ。母、何事も、備には惜まぬが、併し先づ髪を梳いてから、後の事にしやう。白隠、否、先づ遁るゝ道を教へ給へ。其の上にて、髪は何程でも解きましやう。先づ彼の大事を教へ給へ。と互に其の前後を争うて居つたが、白隠は熟ら、母の顔を打ち眺めつゝ、母人は未だ遁れる道を知り給はない。夜前私が烈しく泣き叫んだのを見て、一時其の泣き聲を鎮めやうとて、誑し賺して教へやうと言つたのだア、悔しい。若しさうならば、夜前の様に復た泣き叫ばうかと、飛び退いて齒をくひしばつたので、母は犬に驚き、先づ待て、さらば教ふるであらう。備は常に北野を敬ひ奉れ、熟ら、指折り數へて、備の誕生日を考へるに、貞享二年丁丑の歲、臘月廿五日丑の刻であつて、年月日

時共に丑である丑は天神様の御使で二十五日は其の御命日であるから北野に縁由が深いのであると白隠は之を聞いて大に悦び母に謝しそれから家の佛壇を掃除して普公の御影を掛け香華を供へなどし其の夜俄に天神經を習ひそれから毎夜丑の刻から起き焼香禮拜して出離を祈り經を讀み神名を唱へて少しも怠らなかつた其の心情が如何にも熱烈純誠であつて偉大な信念と勇猛な氣象を具へて居つたのには敬服するのである然るに父は大に之を呵して此のよた者め毎夜油を費して何事をするか稚少な身で看經しても何の用にも立たないと言ふと母は之を辯護して御身が勤め給はぬさへあるに彼が優しい看經まで咎めだてし給ふなと宥めたのであつた

三 香煙眞直に立たせ給へ

けれども十一歳時分の少年であつて勇往直進の氣象に富み遊意物々たる腕白盛りであつたから毎夜の誦經や新勝に出精すると共に遊技を好み悪戯をすることも亦拔群であつた

丁度其の頃は濱箭と云ふものを射ることが流行して居つた此の濱箭と云ふのは濱弓と稱する小弓の矢であつて濱邊で多く射られたからさう名けられたと云ふことである固より當て字ではあるが普通は破魔矢及び破魔弓と書かれたものであつて江戸時代の初世から正月の遊技として兒童の間に流行したものであつたそこで白隠も隠れ忍びて竊に之を射て居つたが或る時座敷の唐紙に菊の紋があつたのを一箭で其の眞中を射透さうとして其の頃兄が柳涓の筆であつた柳蔭の西行の繪を求めて来て床の間に掛け置き甚だ珍重して居つたのを何うした拍子で手が狂うたのか射損じて其の西行の左の眼の珠を

たゝか射破つた。サア大變である。白隠は大に恐れ、戦き一心に兩手を合せて、南無や北野の大神宮大慈不思議の誓に依り、今の落度を露知れぬ様守り給へと、伏し轉び祈り泣きに泣いて居つたが、損所は直らう筈もない。さうかうして居ると兄が歸つて来て、掛物の破れを見付け、急いで取りはづして母の前に持つて行き、よた者の悪業これ見給へと、言ひ捨て、又もや外へ出て行つて仕舞つた。母は言葉なく之を打ち眺めたまふで、敢て叱りもしなかつたが、此の時白隠は泣きつゝも竊に思つた。アラ頼母しからぬ神様よ、斯かる事さへ知れぬ様に守り給はないのか。鬼にも角にも心元ないのは、燒熱であると、神の力を疑ふに至つたけれども、其の夜も亦丑滿頃から起きて香華を奉り、目を閉ぢ合掌して、南無北野の大神宮、輒く燒熱の苦患を救ひ給ふならば、此の香爐の煙をして、眞直に立たしめ給へ、左無くば四方へ吹散らし給へと、默禱して目を開くと、

夜は深々として更け、巨り風も死し、草木も眠ると云ふ頃であるから、香烟は眞直に立ち昇つて居つた。アラ有り難やと、觀念して再び目を開くと、今度は風の爲に四方に吹き散らされて居つた。そこで半信半疑と云ふ有様であつて、甚だ心に悦ばなかつた。すると或る日、神佛の靈驗を考へると、觀音菩薩が一番であると言ふ者があつたので、それから又俄に普門品を習ひ、纔に一二夜ですつかり習つて了ひ、其の後は晝夜普門品と天神經とを並誦して怠らなかつたのである。實に彼が燒熱地獄の出離を願うた氣象は、旺盛なものであつた。或る時又竊に思つた。期様に勤めて誦經しても、灸治杯の熱を思ふと、誦經は左まで効能の無いものであると、此の時白隠は十三歳であつたが、神佛の甚だ頼みにならぬと云ふことを疑ひ思ひ、誦經の功德の少いと云ふことを歎じて居つた。さらば此の地獄の苦患を免れやうとした熱烈な心情は、此の儘で立ち消え

となつて仕舞つたであらうか否な決して左様な輕薄なものではなかつたのであつて、何處にか更に外の方法を見出して救済の途を開かねばならなかつたのである。果して何様な方途を見出したであらうか。

四、出家

救済の光を求め、解脱の水に渴いて居つた可憐な一少年は、丁度盲龜が大海で浮木を求めやうとして居る様に、眞實の方途は無いかと只管焦心苦慮して居つたが、茲に偶然にも解脱の首途をなす機會に出會したのであつた。それは其の時同郡の諏訪といふ處に操人形が來て、外題を「日親上人の鍋かぶり」と云うた。此の日親は日蓮宗の人で、京都本法寺の開山であるが、室町時代の中葉頃の人であつて、「立正治國論」と云ふものを書いて、時の將軍義教を諫言した。すると義教は大に怒つて彼を牢

獄に投じ、嚴しく糺問したと云ふことである。或る時義教は日親に問うて言うた、法華の行者でも火は熱いであらう、何うだ。日親は從容として答へた、否な眞の行者は火に入つても焼けない、水に入つても溺れないと、頑として屈しなかつた。そこで義教は、さらば其の眞偽を試めさうと言つて、鋤を鎔けるばかりに焼いて日親の兩腋に挟み、又鍋を眞赤に焼いて其の頭に被らしめた。時に日親は、容色少しも變らなかつたばかりでない、莞爾として笑うて、毫も苦痛を感じない有様であつたと云ふことである。此の操人形を見て居つた多くの人は、皆感じ入つて覺えず題目を唱へたが、湯の沸くのにさへ恐れて、燒熱の苦痛を免れやうと、種々に肝膽を碎いて居つた。白隱は、之を觀て羨望の情に堪へない。そこで斯く思ふた。日親の様になつたならば、燒熱も遁れることが出来るであらう。吾も亦出家して日親の様にならうと、端なくも茲に出家の志を起し、

歸ツて母に告げて、近日に出家したいと請うた。すると母が答へるには、
 爾は奇特に地獄を恐れて居る、兎も角も爾の心に任して上げやうと。白
 隠は此に出離の途に第一步を踏み出した心地で、それからは日々諸經
 録を習ひ、元祿十一年九月に『禪林句集』を讀み始め、其の年十一月に終
 った。時に年は十四であつた。

翌年十五歳の二月、原の松蔭寺に入ツて、單嶺と云ふ人に就いて得度
 し、名を慧鶴と改めた。單嶺は天性大度量のあつた人であつたが、其の時
 白隠の背を撫して、ぼんさまたしなまんせと言うて、行末を頼母敷く思
 うて居つた。白隠も亦自ら、若し肉身で火にも焼けず水にも溺れぬ様な
 力を得なかつたなら、設ひ死んでも休まないと言うた。やがて單嶺の許
 を辭して、沼津の大聖寺に入り、息道と云ふ人を師として五經や文選や
 を習うたが、息道も亦大に其の氣象を愛して居つた。さて白隠は誦經や

祈禱の精神が漸く衰へて來た時、丁度日親の操を觀て大に感動し、奮然
 自ら進んで日親の様な境地に到らうとして出家したのであつて、多く
 の人の様に親とか兄とかに伴られて寺に行ツて無意義に出家した
 のではなかつたから、其の用意も平凡でなかつたことが推測せられる。
 それで翌年十六歳になると、或る日歎じて曰うた、吾れ出家剃髮はした
 けれども、未だ些少の靈驗もない。嘗て法華經は佛陀一代の經王であつ
 て、其の本志であると聞いて居る。若し之を讀んだならば、定めて大に益
 する所があらうと、乃ち法華經を感慧房から借りて之を熟讀したが、讀
 むこと僅に一過して忽ち卷を掩うて歎息して曰うた、唯有一乘法、無二
 亦無三の語を除いては、皆因縁譬喩の説に過ぎない。斯の經にして、若し
 功德があるならば、諸史百家の書でも亦功德があるであらうと、憤々と
 して大に佛經の愚なるを憤ツて居つた。それで最早佛經を讀まうと云

ふ氣にならなかつたが、特り禪宗別傳の一事を疑つて、纔に出家した精神の生命を維持して居つた。其の意氣は實に衝天の勢を呈して居つた。が是れ等は皆外部に向つた文書上の徑路を進んだものであつて、未だ鋤犁を内面の心田に下すまでには到らなかつたのである。かくて翌十四年正月に單嶺は遷化して法兄であつた透麟と云ふ人が松蔭寺の席を繼いだから、白隱は亦其の恩にも預がつたことであつたらう。

五 馬翁に學ぶ

教外別傳の一着を疑うて來た鬱勃たる疑念は、彼自身を息道の教鞭から離れしめて、諸方の禪林に參せしめた。元祿十六年十九歳の春、春駒の勇むに任せて、沼津の大聖寺を辭し、同國安倍郡清水の禪叢寺にまで、初旅の青き草鞋を踏み慣らしたのであつた。時に堂頭の千英と云ふ人

は『江湖風月集』を講じて、衆僧は皆孜孜として詩文を學ぶことを勉めて居つた。適ま巖頭渡子と云ふ題があつたので、精しく其の行狀を知らうと思つて、『五家正宗贊』と云ふ書を繙き、巖頭の傳を讀んだが、其れが計らずも禪宗に對して持つて居つた疑團をして、一時に水泡に歸せしめたのであつた。そは其の傳末に到ると、左の一節があつたからである。

一日謂衆曰、老漢去時、大叫一聲了去。一日賊大至、貴以無供饋、遂刺及焉。師神色自若、大叫一聲而終。聞數十里。唐光啓三年四月八也。

此の巖頭は諱を全藏と云ひ、支那鄂州(湖北省武昌府)の巖頭院に住し、唐末の騷亂に逢ひ、賊刃の爲に斃れたのであつた。白隱は之を一讀すると、快惱して樂しまない而して思つた。巖頭は五百年の間出であつて、一代の龍門ではないか。斯の人に於て若し生きながら賊難に罹つたなら、死後誰か三途を遁れることが出來やうか。嗚呼世の中に詮なきものは出

二四
家である。如何なる神の祟りであつたか。あたら髪を剃りこぼち此の見
苦しい青道心となつたのか。今更還俗も世に耻かしくさればとて海川
に入るも亦口惜しい。兎にも角にも困り果てたる吾がなれの果てであ
ると、大に悶え苦みて、食も喉を通らなかつたことが十餘日であつた。進
退維れ谷ると自ら活路を見出すものであるが、白隠は又熟らくと考
へた。逆も遁れぬ三途地獄ならば、吾も人も手を取り合ひて落ちやうが
一生を空しく暮しても、却つて楽しいことは無いと云ふので、是からは
詩文翰墨を以て名聲を一世に馳せんと思ひ、詩文は支那の唐代に有名
な李白や、杜甫や、韓愈や、柳宗元やを友とし、墨迹は當時貴族間で盛んに
流行して居つた御家流の元祖である尊圓や、或は養拙やを師とし、大に
外道の見を起して、佛像を見るさへ厭惡するに至つた。今迄は沈痛悲愴
な頗る厭世的思想であつたものが、宛も掌を翻へしたやうに、遽に前

思想を翻轉して、頗る樂天的の思想となつた。此の急激な變化は、誠に面
白いものであるが、是れ等が厭世の樂天思想とでも云ふものであら
う。かくて翌年の春、同伴十二人と共に美濃國不破郡檜村の瑞雲寺に到
り、馬翁と云ふ人に學んだ。蓋し馬翁は當時有名な詩文家であつたので
ある。けれども瑞雲寺は無雙の貧寺であつて、米や薪は皆學徒自身が負
擔しなければならぬのみならず、馬翁は美濃の荒馬と稱せられた性
質無類の大惡辣家であつて、賢愚を擇ばないで漫りに罵詈する。そこで
白隠と一緒に居つた新到の士は、皆分散しやうとして、竊に協議して居
つたが、白隠は獨り思つた。今諸國を擇び搜しても、博學多識翁の様な人
は稀である。其の惡辣位は恐怖するに足らない。且つ母人の給うた行脚
金があれば、米薪から味噌醬油に至るまで、萬事少しも氣遣ふ事はない。
死んでも誓つて他方には往くまいと、同伴の諸子が騒然として行囊を

整へて居つたにも拘らないで、獨り井戸端で大根を洗うて居つた。すると馬翁はいつしか其の背後に立って言うた。鶴や鶴起つ鳥は勇むのうと。それから馬翁と唯二人のみであつて、雨さへ降らなければ馬翁は大垣に遊んだので、天晴るれば人之を馬翁日和と云うたさうである。白隠は獨り寺に在つて、靜に書を読み、馬翁の門人である温馬山と云ふ者が來る毎に、共に百句の連句を賦し、纔に線香二三炷で之を作り、終り刻苦して詩文を鍊磨した。これが白隠の文才をして大に發達せしめた原因であつた。が此の時に當りて、白隠の懷疑の思想は、其の頂點に達して居つて、將に一生を文墨の間に埋没しやうとしたのであつたけれども、白隠の深奥な一大懷疑の思潮は、到底詩歌文墨を以つては埋没し得ないものであつて、其の偶々詩歌文墨の技に耽つたのは、唯一時の心面に浮んだ波瀾に過ぎなかつたので、心裏の奥底には、懷疑思想の源泉が滾々として涌き出で、止まなかつたのである。

六 『禪關策進』に撞着す

そこで心裏の奥底に涌き出でた湧泉は、或る機會を待つて心面に迸發し、飛散して心田一面を潤さんとして居つた時なる哉である。遂に其の尖頭を現はして來て、茲に一時の樂天的魔軍を擊退するに至つた。其の尖頭の顯はれたのは、此の年の夏であつたが、彼は獨り靜かに思つた。縱令詩の連句が李杜に越えても、死後はどうしても三途を免るゝことは出來まいと。果然前思想は復活して來て、彼は復た快々として樂しまなかつた。其の時は丁度曬書の時であつたから、内外の典籍が雜然として古机上に堆積せられてあつた。白隠は之を見て、限り無く歡び、燒香禮拜して祝して曰うた。南無十方一切の諸佛、一切護法の諸神、祇よ我が生

涯に勵み勤むべき道あらば、只今授け給へと、目を閉ぢ閑に歩を移して、机邊に到り、隻手を伸べて、一卷の書を探り取り、再三頂戴して之を見らんと、『禪關策進』であつた。歡んで之を披いて覽ると、慈明が錐を以つて自分の股を刺したと云ふ章に出會した。

慈明。谷泉。瑯琊。三人。結伴。參汾陽。時河東苦寒。衆人憚之。慈明志在於道。曉夕不怠。夜坐欲睡。引錐自刺。後嗣汾陽道風大振。號西河師子。

蓋し汾陽は支那の汾州であつて、隋では西河と稱し、宋では河東路に在つて、今では山西省汾州府に在るのである。汾陽の善昭は支那宋代の禪僧中でも鏘々たる人物であつて、常に毀詆詬罵の手段を施して、學者を鍛鍊した、門風頗る峻辣な人であつた。慈明楚圓と瑯琊慧覺と谷泉大道との三師は、共に汾陽に參じて嗣法した皆一代の傑出であつたが、特に慈明は最も秀拔な人であつて、汾陽の詬罵を忍び、河東の嚴寒に耐へ、夜

坐禪して居つて睡りを催すときは、自ら座右に針を置いて、其れで自分の股を刺して睡氣を覺まし、以つて精修奮勵した人であつた。白隱は是を讀んで宿心が再び煥發し、丁度枯泉が忽ち蘇活した様に、大道心を奮起して前見を抛擲したのであつて、白隱精神界の復古時代を形造つた。此の動機を刺撃したものは、『禪關策進』であつたが、此の書は明末の僧雲棲株宏が編輯したものであつて、多くの佛經や祖錄の中から學者の志氣を鼓舞策勵せしむる様な事蹟や文言を収録したものであつて、白隱は念佛禪の點では、大に雲棲を撃つたけれども、此の書だけは非常に珍重して居つたので、白隱の志氣を鼓舞せしめなければかりでなく、又進修向上の羅針盤となつたので、最も重要な關係を持つて居つた書である。

七 書畫を一炬に焼く

白隠は「禪關策進」を見てから、頓に向上の志氣を復活し來り、是からは諸方の禪關を叩いて、普く善知識を求めやうと云ふ志を起し、眞實禪宗の修行に身を委ねやうとした。そこで翌年の春瑞雲寺を辭して、同國武儀郡洞戸の保福寺に到り、南禪と云ふ人を訪うた。時に南禪の歲旦の詩があつたので、即席に和韻して南禪に呈した。

振起大阿一握霜 招同天下第三陽
祥光輕上丈方地 南極老人獻壽香

是れは瑞雲で養うた詩才に、當時の志氣を加へた、頓速の妙吟であつたのである。南禪から其の詩才を認められて、此の夏六十員の衆僧から拔擢せられて、三老分となつたのである。時に年齢僅に二十一であつた實に頼母しい青年と謂ふべきである。翌年の春、法弟の惠松後に快龍と改めた人と云ふ者が、白隠の跡を逐うて瑞雲に來たが、瑞雲例の貧寺であ

るのに、惠松は一文の草鞋錢も持たなかつたから、留錫することが出來ないで、近隣の寺に頼んで掛錫した。其時白隠は若狭小濱の常光寺に行つて、萬里と云ふ人の虛堂會に與つて居つたが、會中で人々に、貧僧の掛錫する様な寺を尋ねて、伊豫松山の正宗寺は、其の城下が甚だ富裕であつて、貧僧の勤むるには甚だ便利であると云ふことを聞き、そこで瑞雲に引き返して、惠松を伴ひ、共に赴いて正宗寺の衆寮に掛錫した。時に城下歴々の家中が正宗の衆寮には、博覽多識の僧が多いと云ふことを聞き、其の内五人を請じて、茶話をしたいと云ふことを申し込んで來た。時に白隠も亦其の列に加はり、五人同伴で行つたが、各對面の禮も了ると先づ掛物數十本を取り出して、之を見せた。時に讀み悪いものがあると皆笑ひながら、白隠の顔を眺めて居つたが、其の中に殊に字形の正しくない、頗る難讀の一軸があつた。皆眉を擡めるやら、頭を搔くやら、閉口し

て居ったが、其の裏に姑婆と云ふ字があつた。之を見ると皆が言うた、是は難透難解である。師兄よどうか之を解して呉れ給へと。白隠は即ち姑婆は嫁し悪いと云ふ義であると言うたので、皆手を拍つて大に笑うた。其の中に錦囊に包んだ一軸があつたが、皆怪みて之を抜いて見ると、これは愚堂時代に居った大愚宗築と云うた人の墨迹であつて、筆勢や文辭が他のものよりも遙に優れて、如何にも立派であつたので、白隠は大に感服して、竊に思つた。是は唯見道の徳の然らしめたものであると。それから他軸は、碌に之を顧みないで寺に歸り、豫ねて秘藏して居つた所の筆道の傳授書や他の書畫類を一束として、一炬に之を灰燼に化して仕舞つた。實に思ひ切りの好い事ではないか。白隠の性格は斯様にすつきりして居つたのである。是から禪關策進を師として、座右を放さないで、日新の銘として居つたのである。時に年二十二であつた。

此の時白隠の思想は、漸く外面的觀察を離れて、内部の反省に移つて來たのである。だから彼自ら二十二で大疑團を起したと言つて居る。さて是からは晝夜精鍊刻苦して、參禪修道したのであつたが、或る時又佛祖三經を見てからは、決定して佛道の淵源に徹し得らるゝことを疑はない様になつた。其は四十二章經の第二十七章に左の一節があつたからである。

夫爲道者、猶木在水、尋流而行、不觸兩岸、不爲人取、不爲鬼神所遮、不爲河流所住、亦不腐敗、吾保此木、決定入海。

之を一見すると、大に歡喜雀躍して、手の舞ひ足の踏むのも覺えないと云ふ有様であつて、猛然反省して思惟した。吾輩決定の心を以つて、進修して居るけれども、心中常に諸佛の無上妙道は、小智小徳の能く企て及ぶべきものであるかどうかを疑つて居つたが、今此の微妙の金文に逢

うて見れば最早一點の疑惑をも挟む餘地は無いと。丁度他郷で舊知に逢うた様な心地がして、心志一決して、益々修道三昧に入つたのであつた。實に『策進』と三經とは、白隠無二の師友であつたのである。

八 故郷に還る

翌年二十三歳の春、正宗寺を辭して、備後福山の天祥寺に往き、正宗贊會に與つたが、精鍊刻苦の功に依つて、歩いて居りながら歩いて居ると云ふことが解らないと云ふ境界に入つた。これは修禪の結果、三昧が發現したのであつて、精勵の功に依らないと現はれないものである。ところが其の秋、同友を伴うて、歸國の途に上つたが、行路常に狗子佛性の公案を拈提して餘念なく、天を仰いだり地に俯したり、左を視たり右を顧みたりしないで、眞直に前路を瞰んだまゝ、ヂツと眼球を据ゑて、毫も

瞳子を動かささない。そこで途上岡山城の莊麗や舞子須磨の名勝や、其の他人丸の塚や、敦盛の墓、さては小屋野原や、生田の森などの古跡には、遂に一回も眸を放たなかつた。途中歩いては居たけれども、ヂツと立って進まないやうに覺え、唯人家や並木が西に向うて行く様に見えて居つた。蓋し是は關山が東海を經過すること、二十度に及んだけれども、終に富士山を仰ぎ見なかつたと云ひ、又『禪關策進』に、常啼菩薩が空中の聲を聞いて般若三昧を修し、飲食も、晝夜も、寒暑も、内心も、外界も、思ふことなく、又左右や上下を顧視しなかつたと云ふことを模範としたからであつた。空中聲告常啼菩薩言、汝東行求般若、莫辭疲倦、莫念睡眠、莫思飲食、莫想晝夜、莫怖寒熱、於内外法、心莫散亂、行時不得左右顧視、勿視前後上下四維等。

白隠は斯様な奇なる道中をして、備後から遙々十數日を費して、駿河の

故郷に歸つて來たのであつた。元祿十六年に故郷を出てから、凡そ五年目であつたから、親戚や朋友なども多く聚つて來て、一別以來の健康を祝し、又諸處の經歷や苦樂の狀態をも問うたが、白隱は例の心に他念を雜へない、又左右をも顧みないと云ふ主義であつたからして、何等の物語もする筈はない。只叫々と叫ぶばかりであつた。そこで朋友も親戚も皆大に驚き呆れて怪しい物に感つたと噂して居つたのであつた。此の時の白隱の態度は一方から見ると甚だ愚であつて、寧ろ滑稽であつた。が又翻つて當時の精神狀態を考察すると、其の凝然として動かないことが、丁度大磐石の様であつて、擊つても打いても響がない様な一大死漢と成つたのであるから、修行の段階の上では確に或る程度迄進んで居つたので、其の價値は十分に之を認むべき境界であつた。されば是から更に進んで死盡して面して大活を得、心磐を打破する時節が到來せ

ねばならぬのであつた。易にも曰うて居る。窮すれば變じ、變すれば通ず。とだから白隱の精神界にも了然一聲の福音、一陽來復の春候は、近き將來に於て必ず來なければならぬ時機になつて居つた。がそは果して何れの時であるであらう。

九 半夜の鐘聲

白隱の努力は自身を驅つて大死底の境地に入れ、東西を辨せず、南北を別たず、天地闇昏々たる世界に没入せしめた。而して其の鬱勃たる一大精神は、丁度火山脈中で蒸氣が鬱積した様に、轟然として爆發するの如き遠いことではないと想像せられた。時に黃檗慧極の門人で性徹といふ人があつて、越後國高田の英巖寺曹洞宗に住して、『人天眼目』を講じて居て名聲噴々であつた。白隱は之を聞いたから、同行三人を促し、翌二

十四歳の二月、再び故郷を立ち出で、英巖寺の僧舎に到り、性徹に面會して、其の識見を窺うたが、聞いた程の名師でもなかつたので、大に落膽し、竊に殿後の廟裏に隠れて、誓つて七日の斷食をして接心したが、寺中は勿論同行の人も之を知る者がなく、竊に國に歸つたものとして居つた。斯くして七日の満つる夜半に到ると、遙に遠寺の鐘聲が殷々として動いて來て、耳の鼓膜を振動せしめたので、宛も桶底の脱けた様に身心共に落節して、纖塵をも止めない。餘りの嬉しさに覺えず高聲に叫んで、
やれ。く。巖頭和尚は眞面息災であつた。

と、二度までも連呼したので、同行の人は寮中に居つて之を聞き付け、大に驚いて走り來り、手を把るやら、足を曳くやら、互に相悦んだが、白隱は自ら思つた、三百年來未だ自分程痛快に了徹した者はなかつたであらう、四海を一掃しても、敢て吾が機鋒に當る者は一人もあるまいと、是か

らは慢心大に起りて、一切の人を見ることが恰も土塊の様であつた。是れ即ち大死底の闇窟から、俄然活躍し來つたのであつて、禪宗の第一關を打碎いたものであつたが、纔に渺漫たる禪海の一滴を嘗めたに過ぎなかつた。然し是が禪宗悟道の根柢であつて、白隱は其の自ら信ずるの篤き、忽ち天下古今を併呑し去つたのであつた。時に英巖の僧衆は五百人許りで、寮舎の狹隘を感じたから、同宗の隣刹の客殿を借りて、三十餘人を分ち、白隱は推されて、外堂の一老子となつて之を統率した。適ま、一僧あり來りて掛錫を請うた。身長は六尺餘もあつて、大柱杖を振うて立ち、眼光炯々として、其の聲は破鐘の様であつた。皆々是はたゞ者でない。斯様な者でも掛錫を許すべきかと評して居つたが、暫くすると知客が彼の僧を引いて入り來り、白隱に刺を通じて外堂の末席に就かしめた。此の僧は信濃の人であつて、宗格と呼ぶ者であつた。翌月開講が濟むと、一人

の長老が来て、傍に在った『人天眼目』を開き、性徹の辯舌の如何はしい點を指摘し、之を批判して去った。時に宗格は白隠に向つて問うた。彼は一老子であるか。曰く一老子ならば何の用か。曰く彼の人も少しは見識があるけれども此處の判は宜しくない。白隠は言うた。然らば此處の判は如何と。宗格は一々之を判釋して明瞭であつたので、同寮は皆舌を捲いて呆れ、俄に觀を改めた。是からは人々は一層畏れて敢て接近しなかつたが、白隠は獨り久旱に初雨に逢ひ、他郷で舊知に逢うた様な心地がして特に相親しみ、晝夜互に宗門の事を商量して楽しんで居つた。既にして『眼目』も講了となり、分散の前宵となつたから、白隠は竊に宗格を招いて其の師範を尋ねた。すると宗格は徐に答へて、吾が師は信州飯山の正受菴主道鏡慧端老師であると言うた。蓋し慧端は至道の的嗣であつて、實に愚堂の法孫であつたのである。而して愚堂は徳川氏三百年の初葉

に起つて、禪宗の草昧を開拓し、至道は之を繼いで、江戸に關東禪林の根本地を開き、慧端は信州飯山に歸つて其の法を傳へて居たのである。

一〇 正受老人に謁す

却説白隠は越後の英巖寺で、『人天眼目』講了分散の前宵、宗格から正受老人のことを聽き、吾が師範と仰ぐに足ると思つたから、宗格に向つて言うた。余も亦之を拜せんと思つたがどうか。宗格、是は吾も願ふ所である。若し御出ならば御供申さう。但し正受は多衆鬧熱を厭ふから、他人を伴うてはならぬと。相談即坐に一決して、明朝分散の鐘鳴と共に、兩人竊に英巖の門を立ち出で、富倉山を越えて飯山の城下に志したのであつた。英巖の一夏は白隠の一生に於ては實に忘るべからざる重要な時機であつて、初めは遠寺の鐘聲を聽いて豁然大悟し、次ぎには宗格に遇う

て正受老人を訪ふに至つたので、丁度渡に船を得たと云ふ様な好機に會じたのであつた。

四三

其の年四月飯山城下に着し、上倉村の幽邃な森林に入り、正受菴に到りて慧端に見えたが、室を出で、から宗格に話した。此の老尊大にして吾を屑しとしない。蓋し白隠は其の時慢心大に増長して居つたので、早く正受から之を看破せられ、正受は先づ其の鼻柱を折らうとして居つたのであつた。又或る日入室して所解一編を呈した。正受は之を一見すると、直に之を左の手に握つて言つた。這箇は是れ汝が學得底、又右の手を伸べて言つた。那箇は是れ見得底。白隠は若し見得底の呈すべきものがあらば吐却すると言つて、大に嘔吐の聲をした。すると正受は直に一拶を加へて、參禪は實際の參禪でなければならぬ。狗子佛性は何う會したか。白隠手脚の着けやうがない。正受即ち手を伸べて其の鼻頭を押へ

てサテきつゝ、手脚の着け様那と一喝したので、進退維れ谷り、片言雙語も吐くことが出来なかつた。是からは行住坐臥快々として樂まず、雙眼常に涙を含んで居つた。正受は之を憐み、數段の因縁を授けて言つた。疎山壽塔、牛過窓牖、南泉遷化、此の内若し一則でも透過すれば、實に佛祖の兒孫と稱するに足ると。是に於て大精神を憤起して、晝夜豎に咬み、横に噛みて參究したが、半點の發明も無い。そこで悲泣涕哭、雨淚滂沱として誓つて言つた。南無十方魔波旬、及び其餘の惡鬼神將よ、七日にして一則を透過しなかつたなら、立地に吾が命根を奪却し給へと。燒香作禮、暫くも睡らなかつた。一夕正受が縁側に坐して納涼んで居つた時、復一偈を呈したが、正受は一見して忘。想。情。解。と喝破して棄て、仕舞つた。白隠は憤懣の情に堪へないので、亦高聲に叫んであへこべに妄。想。情。解。とやつたので、正受は忽ち捉へて、瞋拳を與ふること二三十して、終に堂下に

四三

突落した時に五月四日の夜であつて、丁度霖雨の後であつたから、堪らない、白隠は泥濘の中に偃臥して氣息共に盡き、大死人の様になつて、暫くは動くことも出来なかつたが、正受は悠然として縁の上に立ちながら、呵々大笑するのみであつた。少時すると漸く蘇生し、登り來りて禮拜し、滿身に汗を流して居つたが、正受は高聲に叫んで言つた。此の穴藏禪法めと。是からは常に呵して穴藏禪法と言つて居つた。實に峻辣を極めた手段ではないか。蓋し此の惡辣高峻な手段や、怒罵呵囂の方便は、白隠をして慢幢を倒却し、暗窟裏の死地を逃脱せしめた、活手段であつたのである。正受は又言つた。今世界を一掃して、關鎖禪を扶起する師を尋ねるに、殆ど白晝に星斗を見んと欲するが如しと。時に白隠は竊に謂つた。今世上の名蓋大刹を見るに、高名の師は殆ど林の様である。斯かる貧困の小庵に住しながら、此類も無き大我慢ではないか。いひて請假して他

方に往かうかと併し他方に往くには、餘りに熱心過ぎたのであつた。かうして此の所謂關鎖禪は、白隠が他日極力鼓吹したものである。

一一 飯山城下の托鉢

白隠は正受の惡辣な手段の下で、辛鍊苦修したけれども、未だ毫末の得方も無かつたのみならず、正受は益々呵罵を極めて、寸毫も假借しないから、心氣常に懊鬱として居つた。或る朝鉢を持つて飯山の城下を行乞し、歩きながらも公案を考へて、寸時も休まなかつたが、ふと一家の門頭に到り、凝然として佇立し、家人が内から去れと叫んだが、些しも耳に入らない。時に其の家に狂人が居つて、忽ち喚つて倒に草箒を握り、奔り出で、白隠の頭上を亂打したから、白隠は被つて居つた菅笠を打ち破られて、眞逆様に倒れ、少時氣絶して動かなくなつた。すると近隣の人々は

狂人がえらい事を仕出来したと云うて、驚き恐れて近寄る者もなかつたが、幸ひ三四人の人が通り掛り、此の體を見て大に驚き、抱き起して氣を付けたので、忽ち蘇生し來り、目を開いて見ると、豈に計らんや、從前難透であつた南泉遷化の公案は、徹底現前して、餘蘊は無い、手の舞ひ足の踏むを知らずと云ふ有様で、手を拍つて、呵々大笑した。行人は之を見ると皆狂僧であると言ひながら、其の儘願みないで去つて仕舞つた。後で白隱は徐に起ちて塵衣を拂ひ、破笠を被り、莞爾として笑を含んで歸路に就いた。其の途中で一老人に會ひ、招かれて、向きに頓死せられたかと思はれたけれども、白隱は微笑した。儘答へもせず、午餐の饗應に遇うて還つて來た。まだ正受の門閭を跨ぐか跨がぬかに、正受は縁端に立ちながら、之を一見して問うた。試みに言へ、何の好事が有つたかと。實に其の眼光は鋭いものである。白隱は進んで精しく所見を演べると、正受は圓

扇を把つて、其の背を撫して言うた。願はくは、備の壽算をして、吾が年に到らしめよ。必ず誓つて小を得て足れりとしてはならぬ。是から勤めて、悟後の修行を專修せよ。小を得て足れりとするは、聲聞乘である。若し、備悟後の修を知らなかつたなら、惜いかな。小果の羅漢となると、かくて正受到に侍すること、凡そ四年であつて、宗門の深旨を參究し、益々其の蘊奥を極めたのであつた。或る日正受は白隱に命じて曰うた。正受は斯かる貧困の地であるけれども、他日老僧の死後、吾子之に住して、終焉の地とせよ。白隱曰く、幸に格上座がある。正受曰く、彼が如きは實に頼みなしと。蓋し宗格は正受隨一の門弟であつて、白隱無二の益友であつたが、彼は氣を養ふことを能くしなかつた爲め、正受の寂後十年を経て、享保十五年十一月に寂し、惜いかな。大業を成し遂げなかつた。正受が頼みなしと言つたのも、亦道理のあつたことで、白隱は當時其の意を解し得なかつ

たが後に至り老眼海に恐るべしと言ひて敬服して居た。

一一一 正受菴を辭す

然るに茲に白隱は先づ正受菴を辭せねばならぬ機會に遭遇して來た。それは正徳元年十一月に舊友三人が越後から尋ねて來て、其の去就を共に爲やうとしたことであつた。元來正受は貧困でもあつたらうが、宗格が初め白隱に言ふた様に、正受は眞實參禪もしない者が、がや／＼多く集まるのを厭惡したので、一人でも好いが、眞に參禪する者を樂しんで居つたので、世間の多衆開熱を以て諒として居つたのは、大に其の趣きを異にして居つたのである。然るに今白隱を慕うて來た三人の舊友は、到底眞に正受の鉗鍵を受けやうと云ふ精神でなかつたので、白隱は一緒に正受菴に止まる譯にもいかず、さうかと云うて、一緒に去

ることも出來ず、暫く兩端を持して決しなかつたが、丁度其の時國元から報知があつて、息道の病氣を告げて來たので、乃ち先づ歸國する事に決し、三人も共に行李を裝うて出發した。時に舊參の居士三四人及び正受老人も相共に送ること二里餘にして、高山の麓に到つた。是からは山路最も峻峻であつて、老足の能く及ぶ所ではない。そこで皆々も相勸め、正受も亦別れて歸らうとしたが、時に白隱の手を把り、低聲に告げて言ふた。向後勤めて、吾子の如き者、兩個を攝出せよ、必ず多きを求むること勿れ。縱令ひ老師の病床に侍しても、水を得て以て足れりとしないうで、勤めて必ず悟後の修を專行せよ。世間一切の塵絲を棄擲して、誓つて毫釐も繫念してはならぬ。時節あらば又來りて、草廬を問へ。實に其の情が親厚であつて、其の言も亦痛切である。無情の山木も爲に哀慟し、無心の澗水も亦嗚咽したであらう。泥んや多年熱喝痛捧を受けて、其の恩が

骨髄に徹して居った白隠に於てをやである。時に地上に拜伏し、血涙數行を灑いで訣れを告げたのであつた。是が正受との永訣とならうとは松吹く風にも露知らなかつたのであるが、正受は其の後十二年を経て享保六年十月六日、平旦跏趺坐、遺偈を書し、古歌を詠じ、大笑して化したのである。世壽は八十で、宗格が菴の側に葬り、文政二年に釋上座が其の法位を昇せて妙心第一座とした。其の行實と偽語とを輯めたものに『正受老人崇行録』一卷がある。

一三 身火逆上す

白隠は正受到別れて山路の峻坂に入り、數日程具に艱辛を嘗め、越後に到りて舊友と別れ、漸く故國に歸つたが、其の間の大悟小悟は數ふるに遑なかつたのである。かくて沼津の大聖寺に入り、息堂の病床に侍し

て湯藥に仕へ、及ぶ限りの看護を盡したが、又正受の殿命を守つて片時も怠らず、毎夜八炷の香を坐した。然るに此に一大病魔の襲撃を蒙り、將に一生を廢物に葬り去らうとした。

悲しむ所は心火竊に逆上し、肺金痛み、水分枯渴し、覺えず難治の心疾を發す。舉措動靜驚悲多く、身心怯弱にして、兩腋常に汗を生ず。動中には一向入ることを得ず。常に陰僻の處を尋ねて死坐す。鍼灸藥の救ふべき所にあらず。今更に飯山も恥かしく、普く智識を尋ねて救ひを求めんと欲すれども、病牀は片時も離るべからず。神佛に祈念すれども靈驗なく、兎やせん角やせん、と心を盡す所(壁生草 卷下)

是は多年辛勞の結果、俄然肺疾に罹つたものであるが、白隠は之が爲め却つて心身修養の功を積むに至つたのであつた。抑も白隠は何様な方法で之を治療したかと云ふと、それは内觀の法と云ふ、氣海丹田の修養法

であつたのである。而して此の法の大要は、吾人が寢床に就いて、また眠
床に入らない前に、仰臥して強く兩脚を踏み伸ばし、氣力を十分に臍輪
氣海丹田と云へる臍下三寸若しくは二寸五分程の下腹部や、腰部及び
足心の邊に入れ、腹部以上は之を清輕にして置いて、氣力が常に腹部以
下に充滿して居る様に練習するのである。

若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざる事
あらんに、鍼灸藥の三つを以て是れを治せんと欲せば、縱ひ華陀扁鵲
と雖も、輒ぐ救ひ得む事能はじ。我に仙人還丹の秘訣あり、爾が輩試に
是れを修せよ。奇功を見る事、雲霧を披いて、峻頂を見るが如けん。此の
秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先づ須
らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りに就かず、眼を合せざる以前に向
て、長く兩脚を展べ、強く踏みをるべし。身の元氣をして、臍輪氣海丹田

腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我が此の氣海丹
田、腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目何の鼻孔かある。我が此の
氣海丹田、總に是れ我が本來の家郷、家郷何の消息かある。我が此の氣
海丹田、總に是れ我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴かある。我が此の氣海
丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法を説くかと、打返へし、
常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果のもらば、一身の元氣いつし
か、腰脚足心の間に充足して、臍下軀然たる事、いまだ篠打ちせざる鞠
の如けん。恁麼に單々に妄想し、將ち去て、五日七日乃至三七日を経た
らむに、従前の五積六聚、氣虛神疲、勞役肺病等の諸症底を拂て平
癒せずんば、老僧が頭を切り持ち去れ。(夜船閑話序)
此の妄想と云ふは、唯心氣を下部に充たしむる方便に過ぎないのであ
る。蓋し此の法は早く印度の婆羅門教中に發生し、佛教の觀法中に入ら

支那では老莊の學中に起因し、古來此の法を實修した人は、印度は勿論、支那や日本にも多かつたのである。白隱は是等の事を詳しく『夜船閑話』や『關提記聞』や『遠羅天釜』などの中に説明したのである。然るに此の法は、白隱が山城白河の山中で、白幽子と云ふ仙人に遇うて傳へたものであると云うて居るが、之は年譜と『壁生草』とが全然合つて居ないし、又白幽子に就いては『日本崎人傳』や『續日本崎人傳』や『玄同放言』などで書いて居るが、當時白河の山中に居つて、世人からは仙人の様に思はれて居つた人らしいけれども、斯様な精確な事を説く様な人ではなかつた。唯白隱が此の法を説いて一般の信を取らうとして、當時世間に仙人の様に吹聴されて居つて、二百歳餘も長壽を保つて居ると云はれて居つた白幽子に姑く名を假りた方便に過ぎなかつたのである。すると白隱は此の法を誰から聽いたのであらうか、今試みに『夜船閑話』を繙いても見

ると、當時の醫書から受けて來たことの多かつたのは、掩ふことが出來ないのみならず、老莊の學や、天台の『摩訶止觀』からも受けて居ることが解る。さうして『摩訶止觀』は禪宗坐禪儀にも引かれて居つて、禪病や魔境の事を詳しく説いて居るのである。それから考へると、白隱は最初此の治療を求めやうとして諸方を奔走して居る中に、『摩訶止觀』を讀んだと察することが出來る。さうして段々之を讀んで行くと、其の第八卷に十種の大乗觀を説明した中の病患の境を觀する法があるのを發見したのである。すると其の中に果して禪病に罹つて身火が逆上した時の治療法が詳しく説いてあるのに、出會したのである。今之を摘録しやう。

心を繋げて、臍中に在ること、豆大の如くし、衣を解いて、諦了に相を取り、後ち目を閉ぢ、口齒を合せ、舌を擧げて、膈に向け、氣をして、調恂ならしめよ。若し心が外に馳せば、之を攝して還らしめ。若し見ざれば、後衣

を解いて之を看熟らば、相貌を取つて還前の如くせよ。此は能く諸病を治し亦能く諸禪を發す。

2 所以に心を繋げて臍に在る者は息が臍より出で還入つて臍に至る。出入臍を以て限りとなせ能く無常を悟り易し。

3 丹田は是れ氣海なり能く萬病を銷吞す。若し心を丹田に止むれば氣息調和す故に能く疾を癒す。

4 丹田は臍下を去ること二寸半。

5 人常に心を足に止むる者は能く一切の病を治す。心を足に止むるを最良の治となす。今常に用ふるに屢深益あり。此を以て他を治するに往々皆驗あり。

6 老壽を得んと欲せば當に足を温めて首を露すべし。

此の衣を解いて相貌を取るといふことは臍輪を凝視して豆大の想を

なすことであつて氣を丹田に充たしむる方法である。又臍で息をする。と云ふのは腹で息をすることであつて今日の腹式呼吸法である。是は白隠の謂うた内觀法即ち氣海丹田法であつて白隠は此の「止觀」に依つて之を實行したと云ふことが出来るのであるから誰からも教はる必要はなかつたのである。又此の法は老子の第三章にも

聖人の治は其の心を虚にして其の腹を實にす。

と曰ひ莊子の大宗師にも

真人の息は踵を以てし衆人の息は喉を以てす。

と曰うたのである。だから白隠は後に至り「止觀」以外に博く是等の書に涉り且つ自己の實驗をも加へて遂に「夜船閑話」と云ふ様ないと奇しき書を構成したのである。

然しながら此の法が吾人の健康法として有効であることは現今醫

學上からも證明せられて居ッて、科學的の根據からして、十分に其の價値を認めらるゝに至つたのである。之は二木博士の『健康の第一義』と云ふ一冊子に詳しく證明せられてあるから、今其の方法の概略だけを記さうと思ふ。博士の説に依ると、此の法は今日で謂ふ腹式呼吸法であつて、之をやるには、先づ端坐して、手は左右から組み合せて臍下に置き、臍部已下は十分緊りを付け、以上は之れに反して自然の状態に放任し、一分間に凡そ四呼吸をし、一呼一吸の間には必ず僅かの静止休息時間を置き、一回の練習時間を三十分として、凡そ百二十呼吸をなし、かくて一日に午前と午後と夜間との三回やる。若し出来ぬものは二回でも一回でも宜い。さうして其の時刻は満腹の時でもいけないが、空腹の時でもいけない。食後少くも一二時間を経過せねばならぬ。そこで彼の夜寢床に就いた時にやるのは、此の腹の空き加減から云ふと、丁度宜いので

ある。斯様にして少し練習して來ると、歩いて居ッても、立ッて居ッても、仕事をして居ッても、いつでも之を行ふことが出来、イハ此處一番と云ふ時は、ウンと力を入れて腹を堅くし、息を靜めて靜の状態に置き、其の儘で仕事をし、平生は腹を動かしては又堅くし、堅くしては又動して動の状態に置くのである。さうして此の法を鍛鍊する効能は、一には膽力を養成し、二には血液の循環を良くし、肺や心臟や胃腸や腦などに最も宜いと云ふのである。然るに人多くは此の法を知らず、知るも練習を等閑に附して置いて、常に胸や肩で息をするからして、白隠の罹つた様な病氣や其の他の病症に感染し、養生其の宜しきを得ずして、遂に廢物となつて仕舞ふのである。之に反して白隠は一旦右様な病に罹つたけれども、此の法を實行する様になつてからは、また三年も経たないですつかりと病魔は夢の様に消散して仕舞つたのである。のみならず、元氣が

已前に十倍して悟道の上にも大なる効果を得たのである。

一四 雪花霏々として林葉に洒く

釋說白隱は斯様に心氣が逆上して來て靜養の必要を感じなければも、息堂の病床は寸時も離るゝことが出来ないので、木に苦悶して居つたが、幸にして法弟の發禪者後の雲居が遙々息堂の病を聞いて關東から歸り來り、相代りて湯藥に侍せんとしおので、白隱は大に喜び、看護の事を法弟に委して、息道に暇を請ひ、輕く旅裝を整へて、伊勢山田の建國寺に到り、定山の發起にかゝる義海の虛堂會に與らうとして發足したが、息道は此の年八月遂に黃泉の客となつたので、白隱は旅中常に「禪關策進」を師友として志氣を養ひ、又處々に高名の知識を尋ねて、病根の救治を乞うたが、皆禪病と稱して、手を下さなかつた。最後に河内の

法雲寺(黃檗宗)に到りて慧極に參謁した。此の慧極は黃檗木菴の弟子であつて、諱を道明と云うた人であつた。慧極が言ふには、禪病は醫治しやうと思へば、倍す重なるものであるが、最も閑靜な處を尋ねて、其の山の草木と共に朽ち果てんと志し、死ぬまで諸方を奔走してはならぬと、それから辭して和泉篠田の蔭涼寺に掛錫した。時に正徳二年の冬であつた。

蔭涼寺は延寶年間曹洞宗の高僧鐵心道印の開いた寺であつて、當時は五十餘人の雲水が集屯して居つて、有福な寺であつた。時に隣席に鐵心の參徒であつた壽鶴と云ふ者が在つて、亦有道の一僧であつたが、白隱は深く鐵心の爲人を慕うて居つたので、壽鶴から其の宗風を聞き、互に交ふことが厚かつた。或る時二人互に誓つて七日七夜不臥の坐禪をなし、憚竹を三尺に切つて竹籠となし、之を對坐の間に横へ、互に約して

若し片時でも眠った者があつたら竹篋で其の眉間を打破しやうと云ひ、兩人脊梁骨を豎起して黙々として對坐したが、到頭七日の満夜に到るまで、兩人共一回も竹篋に手を觸れなかつたのであつた。是は實に懸命の修行であつて、聞いても心地の善い壯烈な仕方であつた。丁度其の頃であつた、一夜大に雪が降つて、霏々密々として林葉に洒ぎ、其の響が如何にも清閑であつて、感興に堪へなかつたので、一首の和歌を詠じた。

聞かせばや篠田の森の古寺の

小夜更け方の雪の響を。

此の時白隠は女子出定の大事に撞着したと云ふことである。時に蔭涼寺で内議があつて、白隠を寺の住職としやうとしたが、白隠は一たび日向に到りて古月禪師に參謁しやうと思つて居つて、まだ住職などゝは夢にも想はなかつたから、其の事は遂に立ち消えとなつて杜舞つた。蓋

し古月は白隠の稍や先輩であつて、諱を禪材と云ひ、妙心寺靈雲派下で、賢巖禪悦と云ふ人の法嗣であつた。當時は日向の大光寺に住して、雷名が一世を震撼して居つたので、四方の俊才も多く、其の門風に靡いて居つたのである。然しながら大般若經などを書寫した點から見ても、白隠程活氣のあつた人ではなかつた。後ち白隠が大獅子吼を鶴林に唱ふるに至ると、其の門庭を辭して來る者が次第に多くなり、就中良哉や東嶺や快巖や大休や天猊や長堂や愚菴やの八士は、白隠門下有數の人物であるが、皆一時は古月の門を叩いた者であつた。白隠の門風は遂に古月の門庭を壓倒し、其をして轉た寂寥たるに至らしめたのである。乍併其れは後年の事で、白隠は豫て其の盛名を聞いて居つたから、一回其の禪關を叩かうと思つて居つたのである。そこで翌年の夏蔭涼寺を辭して先づ京都に出やうとした。時に壽鶴は別を惜み、竊に白隠を送ること

二里餘にして淋れたのである。

一五 驟雨車軸を流し、泥水脛を呑む

白隠は壽鶴と別れて、凡そ一里許りも行ッたと思ふ頃、折りしも夏のことであつたから、忽ち奇峰の様な雲は、油然として南山の一角に起り、見るく碧空は恰も墨汁を流した様に掻き曇り、車軸を流す様な驟雨は、濤濤として滴ぎ来り、雨水忽ち路を侵して漲溢し、泥水は脛を呑んで容易に進むことが出来なくなつた。けれども白隠は少しも屈せず、雨を衝いて數町も進んだと思ふ頃、圖らずも荷葉團々の顔に入得し、丁度夜半に果日を見たやうであつて、歡喜の餘り、覺えず泥水裏に顛倒して、衣服は皆泥水に塗れた。而も衷心竊に謂うた、斯かる希代の大歡喜、衣袍の染汚位は、惜むに足らないと、泥水中に倒れた儘、少しも動かなかつた。處

が偶ま三四人の行客が通り掛り、大に驚いて走り寄り、抱き起して頓死したかと問うた。時に白隠は忽ち手を拍つて大に笑うたのであつて、丁度飯山で南泉遷化の公案に徹底した時の様であつた。是れ白隠一代の中で大歡喜を得た一つなのである。蓋し此の頃は支那南宋時代に傑出した禪宗の泰斗である大慧宗杲の作であつて左の様である。

荷葉團團圓似鏡、菱角尖尖尖似錐、
風吹柳絮毛毬走、雨打梨花蛺蝶飛。

さうして之は圓覺經に曰うてある、眞妄不二の境界を領したものであつた。

善男子、但諸菩薩及末世衆生、居一切時、不起妄心、於諸妄心、亦不息滅、住妄想境、不加了知、於無了知、不辨眞實。

白隠は雨中に此の大歡喜を得て、嬉笑面に溢れ、旅程の辛勞をも忘れて

程なく京都に着いた。偶々舊友三四人が日向から歸つて來たのに逢ひ、互に一別以來の無事を祝しつゝ、古月の爲人を問うたが、皆は口を揃へて彼は實に五百年の間出であつて、千歳の優曇華である。吾々は師兄が參謁し給はぬのを惜むと言うた。すると傍に一僧があつて、間出と優曇とは吾れ知らず、若狭小濱の圓照寺に鐵堂と云ふ人がある。愚堂の法嗣であつて、石隱の侍者であり、堅剛無比の大道人であつて、遠近貴賤の渴仰も淺くはない。藪から棒にやつたので、古月の事も雲の中に隠れて仕舞ひ、白隱は扱て思ふた。此の人は是れ正受と叔姪の間柄である。餘方は姑く措くも訪はねばなるまいと、そこで遠も近も知らぬ法外道進む心は若狭地や、人の心は黒谷の磨けばいつか白川や、浮きつ沈みつ笹小舟、焦れ行く身のしほもなや、小濱にこそは辿り行くと言うたやうに、遂に圓照寺に着いて鐵堂に隨身した。或る時熱らゝ、慧極から指南せら

れた。清閑の地と云ふ事を思ひ出し、美濃國武儀郡菅谷に近き山邊に草菴が在つたのを思ひ浮べ、翌年の夏が過ぎてから圓照寺を辭し、近江を歴て美濃に入り、菅谷に行いて彼處此處と草菴を尋ねて見たが、菴はいづしか廣絶して其の趾は麥畝となり、穗莖漸々と云ふ有様であつたので、進退維れ谷り、其の秋同國山縣郡岩崎の靈松寺(曹洞宗)に入つて萬休に依つた。

一六 手を出す勿れ

此の靈松寺の僧堂には五十餘の雲衲が居つたが、萬休を始めとして皆當時一般の禪風を代表して居つた默照枯坐の徒であつて、老少共に粥飯を喫する外は、晝は堆々として列坐して、居睡りを始めるので、丁度大勢が揃うて櫓を推して居る様な奇觀を呈し、夜は解定の鐘を待ち兼

ねて居ッて各枕を列べて臥し互に高聲で大安樂なり大安樂なりと唱へるのであつたけれども白隠は獨り勇猛の志を憤起し誓ッて腋を席に着けず片時も亦睡眠せず毎夜此の大安樂の徒を以ッて長坐不臥の警策として居ッたすると或る時堂の一隅で三五輩が低聲に耳語くのを聞いた曰く彼の如き可憐生癡鈍の漢子未だ大乘不生の安樂を知らずして懊惱して居る實に憐愍すべき部屬ではないかと彼等は白隠を以ッて憐愍すべきものであると耳語いたが白隠から云ふと彼等こそ實に憐愍すべき部屬であつて其の愚は牛馬にも劣ッて居るのである白隠は之を聞いて噴飯に堪へなかつたであらうが拚し唯噴飯で以ッて休むべきものでない大に警鐘を鳴らして彼等を惰眠から覺醒せしめやうとしたそこで或る時丈室に詣し萬休に告叩して言うた今一堂の諸兄弟を見ると晝夜枯坐睡眠を以ッて急務として居る恐らくは彼等

の死後必ず惡處に墮落するであらう其の時は只和尚を恨み奉るばかりである萬休其は皆手出しである手を出たす莫れ白隠然らば和尚も亦彼等の様にして隻眼を開き給ひたるか萬休老僧の眼も亦汝の管する所ではない白隠吾輩は和尚を以ッて模範とするものである和尚の眼の如きは管せざるべからず萬休吾れも昔は踏斷の時節あらんことを思ッて大に清苦した白隠然らば何で彼等も亦踏斷の時節あらんことを思ッて清苦せしめて其の眼を開かしめないのでか彼の様なことをして捨て置いたなら彼等は必ず死ぬるまで眼を開くことは出来まい剩へ死後には必ず黒繩地獄に墮落するであらう萬休只專一に自己の眼を管せよ他人の眼を管するな白隠某甲の眼ならば縱令百枚の玄能を握り晝夜に撃ち穿ッても屎皮だも剥げない底の眼である萬休は是に至ッて唯微笑するのみで何とも言はなかつたが白隠の窮迫は頗る

精銳を極めたものであつた。是れ默照禪の好標本であつたので、他日痛撃措かなかつたのは、是等の點に起因して居るのである。

一七 岩瀧山中の隱栖

其の頃又白隱は、太郎丸の祖海と云ふ老僧から、夢窓國師が甲斐の乾徳山で串柿半顆を食して一夏を過したと云ふ苦行談を聽いて、益々修養の必要を感じ、一層隱栖の心が切となり、其の翌正徳五年の二月に靈松寺を辭して、曾て夢窓の道場であつた美濃の虎溪に到りて菴居の地を求め幸うとし、途中太田を過ぎて、午餐の茶を乞はんとして路傍の一精舎に立ち寄つたが、豈圖らんや寺は太田の満願寺であつて、住僧は數年以來の舊知である陳首座であつたので、互に打ち驚きつゝ一別以來の無事を祝し、其の夜は其の寺に一泊し、翌朝辭して虎溪を尋ねやうと

した。時に陳が今更虎溪を尋ねらるゝのは何の爲かと問うたので、白隱は包まず所志の犬要を語つた。陳曰く、若し虎溪に於て心に契ふ所がなかつたなら、必ず此處に歸つて來られよと、それから白隱は別れを告げて虎溪に到り、諸處に菴居の地を求めたけれども、心に契ふ處もなかつたので、大に力を落して太田に歸り、之を陳に計つた。陳は豫ねて之を知つて居つたので、直に菴居の地を撰定し、太田の北方一里許の岩瀧山と云ふ幽邃清閑な地を下し、暫く白隱を河浦に置き、同山の富豪鹿野徳源と云ふ老人に計りて一菴を經營せしめ、一ヶ月餘にして落成したから、白隱を迎へて之に居らしめた。是からは岩瀧菴に隱れて、凝然默座して、靜に内觀の法を修し、夜座常に天明に達し、日に白米糲に一掬を煮て粥となし、以つて二時の食糧に充て、先に聞いた慧極の教訓と夢窓の苦行とに擬したのであつた。斯くして一月餘を経たが、少しも飢渴を覺えな

いのみならず、身心は次第に勇壯となり、其の間に大小の歡喜を得たことは無數であつた。是れ全く氣海丹田の修養法に依つたものであらう。此の冬雪夜一首の和歌を詠じたが、如何に修養に心を用ゐたか、解かる。

わすれては、寒しとぞ思ふ床の雪を。

はらふひまなき人もありしに。

一八 松蔭寺に歸る

岩瀧山隱棲の翌年即ち享保元年其の父宗彝居士は譜代の老僕夜計七兵衛を岩瀧山に遣はして白隱を迎へ、歸りて松蔭寺に住せしめやうとした。蓋し松蔭寺は臨濟宗妙心寺派清見寺の末寺であつて佛老國師祖元の弟子天祥を以て開山とし、徳川三代將軍の時、宗彝の叔父天瑞が

之を中興して妙心寺派となし、將軍家光から御朱印地十四石六斗を賜はつたと云ふことである。然るに此の時寺産は皆債主に奪はれて仕舞ひ、松蔭の古刹は廢頽頗る甚しく、殿壁は崩れて蒼鼠は古瓦の間に竄れ、堂屋は破れて雨露は佛像を濕し、寺中には古壘僅に二三枚を餘すのみであつて、まるで狐狸の住家と化して居つた。是に於て彼の父は之を見るに忍びず、白隱を引いて其の復興を計らしめやうとしたのであつた。白隱は時に謂うた。論語に曰ふ、危邦には入らず、亂邦には居らずと。今此の清閑の地を棄て、彼の荒敗の處に入るは、甚だ古人の言に違ふけれども、往かざれば家君老後の大望に背くと。そこで遂に岩瀧山を出で厚く徳源老人に辭し、夜計七兵衛を引率して、其の年十一月下旬を以つて郷國に歸り、尋いで松蔭寺に入つた。時に年三十二である。

其れから諸檀越や同門の尊宿や清見寺陽春やの勧めに依り、翌年正

月十日を以ッて入院の式を擧げ、是から松蔭の破屋に住して、夜間には星光と月色とを室内に仰ぎ、雨日には笠を戴き、屐を着けて堂中を歩いた時に覺左衛門と云ふ一老僕があつて、常に薪を拾ひて晨昏の用に供し、又一僧が來て之に侍し、日に食を乞うて給して居つたので、其の窮困の狀は筆紙に盡し難い程であつたけれども、白隱は故國を出てから諸國を漂浪すること此に十五年であつて、諸種の境遇に逢ひ、幾多の艱苦を嘗めて初めて故郷の山に歸臥したのであるから、寺は貧困であつたとはいへ、亦慰安した點も決して少くなかつたであらう。左の一首の歌は此の時に詠せられたものであると云ふ。

なさけあるもつらさも遠くなりはてぬ

うれしやよその山は尋ねじ

白隱は是から松蔭寺に住して、又他に赴かず、常住の貧困や庫間の艱難

やは一切抛擲して顧みず、専心一意法門の爲に盡瘁し、晝は博く内外の典籍に眼を晒し、夜は豫め一個の竹籠を設けて置いて、其の中に坐し、内觀と禪觀と學識とを並修め、以ッて知識を廣め、見地を高うし、兼ねて元氣を養成した。是に於て従前の病惱は底を拂うて平癒するに至つたのであつた。此の時に當りて、父の心情も大に慰安せられたと云ふことは察するに餘りあるが、餘命は長く此の樂みを保たしめないで、此の年十二月遂に不歸の客となつたので、白隱の痛惜も亦言ふに忍びなかつたであらう。

一九 白隱と號す

松蔭寺入院の翌年即ち享保三年十一月には、京都に登り、妙心寺第一座の位に昇ッて白隱と號し、法兄透麟の法嗣となつた。白隱の號は富士

山の雪景から得たものであると云ふことである。

白隠朝夕富岳に對して自ら怡ぶ、一日富岳いづくにか隠れて眸中に映じ來らず。因つてつらく、四邊を視るに、富岳前後に圍繞せり。時に白隠自ら號して白隠と呼ぶこと三たび、富岳數歩を退きて、固坐するを感ずけだし、富岳つねに雪に隠れて白きを以つてなり。のち白隠の名天下に轟き、その徳を仰がざる者なし。里俗に謠うて曰く、「駿河には過ぎたるものが二つあり、一に富士山、二に原の白隠。」(森大狂氏「近世禪林言行録」)富士山は吾が邦山嶽中壯麗雄大なる第一峯であり、白隠は吾邦禪僧中秀拔優偉なる第一人であつて、共に吾が邦の二名物である。是から此の二名物が相對して、心靈界を照さうとするのであつて、實に千古の偉觀であつたのである。

白隠は正受の法嗣であるのに、何故に透麟に嗣いだのか、之に就いて

は、白隠自ら三嗣の判をなして之を辯じて居る。

三嗣の判あり、是れ亦知らずんばあるべからず。三嗣とは何ぞや、曰く、古人曰く、上士は冤に嗣ぐ、中士は恩に嗣ぐ、下士は勢に嗣ぐ。冤とは何ぞや、熱喝瞑拳爾が心肝五臟を奪却す、是れ冤に非ずして何ぞ、恩と勢とは言ふに足らず、其の中授業師の命に依りて黙止しがたぐ、恩に嗣ぐものあり、予の如きは、……惜むらくは冤に嗣いで、上士と爲らざりし事を、(「壁生草」卷上)

蓋し單嶺は白隠の出家後間もなく死し、透麟は其れに繼いで松蔭に住したので、師兄ながらも白隠の先住であり、且つ授業の恩もあつたので、之を餘儀なくせられたものであらう。

我は中士にして、恩に嗣ぐ者なり、手が先師老漢の如きは、實に是れ今時無智不生の立枯禪なり、一點の世念なく、方寸の世務を知らず、山賤

の白木の合子其儘に漆付けねば剝げ色もなし唯だ其身其儘の佛なりと云ひて萬縁を顧みず此故に松蔭の古寺貧困窮枯上漏下濕……

〔壁生草〕
卷下

白隠は其の授業師を惡口したけれども亦當時の禪風を痛慨し極力排斥した引例に過ぎなかつたのである。之に依りて其の嗣法の真相を知ると共に當時松蔭の廢頽した主要な原因も推知せらるゝのである。是から常に講席を開き參禪の徒も漸く集まつて來て松蔭寺も次第に復興し來り所謂駿河に過ぎたるものゝ名聲が著はるゝに至つたのであつた。

二〇 蟋蟀古砌に鳴く

前に言うた通り白隠は十六歳のとき法華經を讀んで其の説く所が

荒誕不稽であるとして落膽したことがあつたが享保十一年四十二歳の七月自ら看經勝を掛けて再び之を讀み一夜第三譬喩品に到ると丁度庭前で蟋蟀が連りに鳴いて居るのを聞いた。其の刹那豁然として法華の深理に契當した。蓋し法華の譬喩品は有名な長者火宅の譬喩を説いたものであつて法華の眼目である一乗と三乗との關係を喩説したのである。そは大長者の莊大な邸宅が唯一つの門を餘したばかりで其の周圍から熾然たる猛火が焚え上り其の炎々たる火焰の舌がさしもの大厦高樓を嘗め盡さうとして居る。此の大火の修羅場は吾人の生活して居る貪欲瞋恚愚癡の多い社會の状態に譬へたので其の老大富豪な長者は佛陀に比し其の火宅の恐るべきを知らないで嬉戲娛樂して居る子供を以つて吾人の生活に喩へ此の猛火に驚いて子供等を其の中から救ひ出さうとして長者が假りに門外に出ると美麗な羊車や鹿

車や牛車などの三ツの車があると云ふのを以つて、佛陀が吾人を救済しやうとして、聲聞と縁覺と菩薩との三乘を説いたのに比し、子供が其の綺麗な三ツの車を貰はうとして喜んで門外に出ると、長者は危末な羊鹿の二車を與へないで、純淨潔白な白色の毛の牛に牽かれてゐる、高廣莊嚴な七寶の一大車を與へたのを以つて、佛陀が今三乘の方便説を捨て、大乘眞實の一佛乘を説くに比した、最も微妙な譬喩であつたのである。斯様に三乘の説は遂に捨てねばならぬ下劣なものではあつたが、決して虚妄の説ではなかつた。若し初めに三乘の方便説がなかつたなら、吾人は此の三毒熾然たる三界の火威を出ることが出来ないので、遂に焼死して仕舞ふのであるから、如何に高廣莊嚴な唯一大乘の妙法があつても、吾人は到底之を得ることが出来ないのである。されば三乘は初めから之を下劣であるとして捨て、仕舞ふべきものではない。否、

八〇

此の方便を假り、之を階段として、一乘の極致に到達すべきものである。白隠は初め唯一乘の法のみありて、二もなく、又三もないと云ふのを以つて、法華の眼目であると言つたが、今此の微妙な譬喩に依つて、一乘と三乘との關係を覺悟し、其の深玄微妙な眞理に契當したのである。是に於て初め心に起して居つた所の疑惑は釋然として、氷の様に消融し去り、經王の經王であると云ふことを了知し、初めて正受老人平生の受用を徹見し、是からは更に佛陀や祖師の言教を疑はぬ様になつたのである。之は白隠が一代に於ける大歡喜中の最大歡喜とでも謂ふべきものであつて、白隠と法華との關係は頗る密接不離な因縁を有つて居つたのである。それから白隠は法華經に關して二三點辯じて居るが、今左に妙法蓮華の四字を解説した文を掲げて、其の一斑を示さうと思ふ。

予寶曆戊寅の秋、田氏久齋が請に應じて、遠州高塚地蔵院に於て、息耕

百則の頌古を評唱して以ッて法施に充つ久繫白く妙法蓮華經の說得て聞つべしやと曰く妙法は人々本具の眞性にして體なり蓮華は譬にして用なり問ふ春花秋葉算數も盡すべからず中に就いて獨り蓮華を以ッて妙法の譬喩とするは何んぞや答へて曰く人々本具の性萬物の根元天地の太祖として最も貴とき御法なれども一切衆生の無明塵勞の游泥の底に在りては尊貴も下賤も宮も葉屋も同一無明の泥土にして分曉なき事恰も蓮の泥土の底に在りて葦根蘆根菖蒲根只一同に泥土なるが如し池水の澤を受け春夏の暖を得る則は荷葉團々として根莖萌じ出で一華僅に開敷する則は色香尊貴亭々たる花の君子なり萬紫千紅互に嬌色を逞じうすといへども日を同じうして語るべからず人々本具の眞性も亦斯くの如し精鍊刻削苦じて心華發明せざる以前は唯是れ一枚塵勞の泥土なり一旦豁然

として貫通するに至りては天地指萬物一馬長河を攪して蘇酪をなし荆棘を糞して栴檀林となす諸佛も是を得て無上正等正覺を唱へ給ふ是を失ふ則は諸佛も亦一枚の毛道凡夫なり此故に一切衆生をして佛智見を開かしめんが爲に唯是れ暫時善巧方便の譬喩ならんのみ(八重上)

これで其の説明の大體が解るであらう彼の孔子も四十で惑はずと曰ひ孟子も四十にして心を動かさずと曰うたが白隱は今四十二で法華の妙理を明らかに佛祖向上の玄機に徹底して更に疑はないと曰うて居つた古人も今人も同一轍であると謂うて可い

二一 『神社考』を讀む

享保十八年白隱は『神社考』を讀んだ蓋し『神社考』は江戸時代の初世

に出た朱子學派の奏斗である林羅山の著したもので詳しくは本朝神
社考』と云うて六卷ある。羅山は本書の序文にも言うて居る様に、元來排
佛家であつたから、神佛混淆の思想を排し、天照皇大神の本地は、大日如
來であつて、八百萬神は皆佛菩薩の垂跡であると云ふ説を破し、神社に
對して苟も佛教に關した説があるときは、皆之を其の末段に附し、且つ
一字を低下して記し、以つて神佛混淆の説を取らなかつた意を寓して
居る。然るに白隠は之と正反對で、神佛の同體であることとを主張し、且つ
本地垂跡の説を抱持して居つた。

願ふに、未だ佛は三世貫通せる大聖なり、神も亦三世洞明佛と異なる
事なし、是内秘同體なる故なり、願ふに、夫れ我が六十州の扶桑、八萬
の鎮座有りて、高明の徳を懷けり、靈驗妙應寔に在るが如し、佛日、桑枝
に上りてより、後ち手有餘載、豈八萬經の佛像のみならずや、豈手萬軸

の經卷のみならずや、是れ本迹不二、水波同體なるものにあらずや、

〔鬼神傳〕

だから白隠は隱然として羅山の説を破したものと謂ふことが出来る。
其の他白隠は嘗て『沙石集』を讀んで、春日明神が解脱上人に宣託せら
れたと云ふことを記し、道念の貴ぶべきことを説いた。

中古春日大明神解脱上人に告げ給はく、拘婁孫佛より以來、智者高僧
の菩提心無きは、皆盡く魔道に墮すと、此等の故實を聞くに付けても、
歸命し尊重し信受し奉行すべきは、無上菩提の大道、佛國土の因縁、菩
薩の威儀なり。〔八重誓〕

是も亦神佛一致の思想ではないか、其の他白隠を『壁生草』と名け、之に神
格を附して、壁生草明神と曰うた。

予も亦縦ひ思難に罹ること有りとも、永く佛恩を報せんが爲に、箇の

護法善神を頼み留む御名を壁生草明神と稱し奉る此神世上に立たせ給はん中は枯坐默照不生の黨縱令天下に瀰滿しありとも必定眞風の地に墜つること無けん是れ亦予が大願海なり(壁生草)蓋し壁生草は何時迄草の義であつて壁などに生ずる草の稱である。人生の限りありていと憐き意に用ひられたものであつたが此處では其の反對で何時迄も長いと云ふ無限の意に用ひられたのである。是は白隠が自分を以つて禪風擁護の明神と崇めたので默照枯坐の禪風の破滅を永久に誓つた大願力の發現であつたが又以つて神佛同體の思想を表したものと云ふことが出来る。

二二 僧堂を建つ

元文元年の頃は松蔭寺の僧徒も未だ僅かに人許りであつて門下も

甚だ多くはなかつたが此の秋に禪堂を建てたのを見ると其の勢力が決して侮れなかつたと云ふことを證明して居る。さうして此の禪堂を建てるに就いて最も骨を折つた者は丹後の澄と豊後の丹とであつて是等の士は皆工事の土木に従事して瓦を運搬したり壁泥を捏ねたりしたのであつて其の辛勞は一通りでなかつたのであつた。そこで白隠は左の長偈一篇を賦して其の勞を謝し詳しく當時の有様を詠じた。

構小僧堂數十日 善終者少孰無初

丹豊後産澄丹後 如有舊因能阿余

捧鉢先鋒冰雪裏 踏碓殿後水薪餘

泥盤乍擲磨盤轉 粟粒多加麥粒茹

擔泥過廊顏如鐵 把槌走棟足如狙

屐摧鞋破襪無當 襟薄袂窄裳沒絮

巨艱細辛終不避
 庭間擁葉豎梁骨
 終沒一檢酬勞苦
 曾無隻字及時書
 瞑拳怒眼家常飯
 老屋折牀平日居
 恨老無看公等末
 勉旃誓莫爲聲譽

終身道業如今日 佗日果是方福會（荆叢毒）

さうして白隠は斯くの如き勞働の間でも頗る峻峻な宗風を鼓吹して、怒罵呵咄、瞑拳熱喝の辣手段を以って諸弟子を鉗槌したのであつた。此の冬原の富豪である、植松與右衛門季統と云ふ人が、亡父追薦の爲に、妙智山觀音寺の古寺を恢復して、僧堂や僧厨を建て、白隠は其の請を受け、て入佛の供養を修し、且つ梁牌の銘を作つた。此の植松氏の家では下女や下男には雨降りには傘を翳させなかつた。と云ふ奇妙な家法があつた。

ので、白隠が此れに就いて同家の下婢を誡め、且つ其家法を改めしめた。と云ふ、一の奇談が遺つて居る。

原驛の富豪植松與右衛門、資性敦厚にして、能く家を守る。その家法に奴婢の傘を携ふるを禁ず、之が爲めに奴婢は傘を知人の家に托し置きて、外に出づる時之を用ふるを常とす。ある日一婢新一柄の傘を購ひ、松蔭に來りて、おのが名を記さむことを求む。侍者はこれを諾し、事の情を白隠に告ぐ。白隠すなはち筆をとりて題していはく、雨が降らうが車軸がしよが主の仰せはそむくまい。婢もとより文字を知らず、之をおのが名を記せるものと信じ、雨の降りける日事に托して暇を乞ひ、その傘を張りて行く。見る者みな之を嘲り笑ふ。婢これを怪み人に問うて始めてその名を記せるものにあらざるを知り、大に怒り、松蔭寺に來りて傘價を償はむことを乞ふ。白隠よつて婢を延きねも

ごろに主に事ふるの道を諭し、また奥右衛門に逢ひて奴婢もまた人の子なり、決して賤むべきにあらず、それをして雨に打たれしむるときは、不仁の太甚しきものなることを諭し、その家法を改めしめたりきといふ。(近世禪林言行録)

當時の様な階級制度の盛んな時でも斯様な家法は珍しかつたであらう。此の家法の改むべきは言ふまでもないが、白隠が傘に替した歌は、従者が服膺すべき格言たるを失はなかつた。

二三三 『虚堂録』を評唱す

白隠が松蔭寺に住してから、茲に二十餘年を経たが、其の間門弟の請に應じて祖録を評唱したことは三十餘度に上り、東西雲衲の來つて錫を掛くる者は益多きを加へ、爲めに會計は常に困難を極めて居つて、朝

夕の粥は眼球も映るばかりに薄くあつた。鬼に角當時東は奥州から、西は九州に至るまで、悉く化縁を募つて居つたので、其の門庭の盛んであつた事が想像せられる。斯様に門庭が繁興すると、どうしても玉石混淆と云ふことを免れぬのは當然であつて、最初掛錫した當時は殊勝に參禪を勉勵して居るが、また一ヶ月も経つか経たないに、ろく／＼横着を始め出し、僧堂の規矩を蹂躪して、輿黨を結構し、庭園や廊廡を横行して、放歌高吟し、或は井戸索を截り、或は鐘鼓を墜落し、田圃の芋を掘り、大根を抜き、厠上の板を外して、人の屎坑に絡没するを喜ぶと云ふ様な亂暴狼藉を働き、何うにも斯うにも始末にをへないやうになる者が多くあつて、何うも此の時分の禪僧と來たら、厄介な者であつた。かくて元文二年の冬始めて他山の請に應じて、伊豆の臨濟寺に赴き、『碧巖録』を提唱したが、聽衆二百餘人もあつて、大に盛會であつた。此の時良哉と大休と

の二人は此の講評が大に從來のと異なつて居ると云ふことに就いて類に驚いて居つた。蓋し良哉は尾張の人であつて享保十九年春白隠に謁し詩偈を作ることが上手で常に白隠と應酬して居つたのである。だが白隠は良哉を誤つたことを深く歎息して吾れ良哉を許したことが甚だ早かつたから彼れ今事を濟し得ない。若し三年を待つて之を許したなら天下彼を奈何ともすることが出来なかつたであらうに言うた程の人物であつた。又大休も鶴林門下鐵中の鏘々たるものであつて諱を惠防と云ひ山城の人である。初めから工夫純一であつて京都の東福寺に居つた時などは市中で馬車にぶつつかつて馭者から叱られたことが度々であつたさうである。遂翁が彼を評して深く法源に徹した者は大休一人のみであると言つたのでも其の人物が解かるであらう。さて其れから同四年になると門弟子等は皆迫つて『虛堂錄』の評唱を請

うた。白隠は再三謙讓して之を拒んだけれども諸弟子は固く請うて休まない所から遂に之を諾し。個強の侍者二人を率ゐて比奈村の石井玄徳と云ふ人の宅に到りて『虛堂錄』を繕き、そこで『息耕錄開筵普說』一篇を草し、且つ講筵の式を演習した。蓋し虛堂は諱を智愚と云ひ息耕と云ふのは其の異稱である。支那南宋末葉の人であつて、大應國師南浦紹明の師である。さうして大燈は其の門に出で、關山は又其の門に出でたのであつて、實に白隠一派の祖であつたのである。かくて翌年の春に至りて之を評唱したが、聽衆は四百餘人も集まつて來て實に空前の盛會であつた。其の普說と云ふのは『虛堂錄』開講の汎說であつて、虛堂の宗風を提唱したものであつたが、それと同時に雲門や大慧や黃龍や大應や正受やの宗風を發揮し兼ねて當時の禪風を攻撃した。而して先づ劈頭第一に當時松蔭門庭の状態を曝露したが、宛も之を眼前に觀る様な心

地がするのである。

予享保初被業風吹住此破院單丁者二十年其中間江西雲袂湖南海衆
于經子錄請評唱竟講義或裁數百衆名簿或綴數十行請疏妨予墮眠者
大凡向三十度其中間有志氣憤然者認西東諸老報近遠檀信欲強力折
之欲隨命塞需常住枯白庫間艱酸東極與羽西際肥築誰則不知復恐近
世道微法衰不羈晚進無賴後生其始到時閑雅態度寔可愛善順志氣寔
可貴將謂念生死求透過底真正衲子也既而未經一月泥視龜鏡塊看鴻
規引伴結黨橫放縱逸涉庭階喚呼立廊廡諷詠宗師不能伏者舊制不得
或截斬井索推落鐘鼓窺虎關出穿狗竇入環列堂前野舞村歌蟻聚山後
雷同浪拍栽菜刀於暗路積水瓶於步廊鋸廁上之板令人陷墜屎坑酒甕
下之柴令人困苦晨爨逞醜態於茶店盡鄙陋於酒肆在叢社中精鍊刻苦
者雖千百人九旬不越門閭故人無見其光儀趨街市外縱逸醜惡者雖兩

三豎多日在露明故誰不知其黑業噫恧能放者七八箇而蒙瓊玷者幾萬
個哉玉石共燒金鐵皆爛於此善信男女賤沙門如泥猪蔑僧儀如癩狗羅
行人詞鋒銘處士口碑悲哉（息耕錄開）

斯くの如く門庭の醜態を曝露し僧風の壞亂を慨歎し大に學者の反省
を促したのであるが反面から見ると是れが鶴林の門風の活氣あつた
現象とも言ふことが出来る然しながら決して之が眞の活禪風である
と言へないことは勿論であるだからして白隱は是等の徒に對して惡
魔呼ばはりをなし剃頭の闢提と稱し方袍の外道と呼び肉身の魔羅と
叫び地行の波旬と號したされど是等は皆血氣に逸る青年の事であつ
て無邪氣な所もないではないから稍や恕すべき點もあつたが當時一
方の頭腦となつて魔風を鼓吹して居つた者に至つては到底之を看過
する譯にはいかなかつた此れは即ち念佛と默照との三禪風を鼓吹し

た者であつたのである。白隠は此の二禪風を以つて宗風の腐敗墮落したものとなし、叱咤攻撃殆んど餘力を遺さなかつたのであるが、之を當時の禪風に比すると、宛も鶏群の一鶴とも謂ふべき感があるのである。

五六

二四 念佛禪を排す

念佛禪は禪と念佛との混淆を意味した名稱であつて、特に元明の禪風を代表したものである。至道や正受も之を排斥したのであるが、白隠も亦是等の思想を承けて大に之を撃つた。さうして其の攻撃の標的となつたのは、明の雲棲株宏と鼓山元賢とであつたが、特に吾が邦で直接に影響を受けたるものは、黄檗の禪風であつた。

白隠の禪と念佛とに對する大體の思想は、禪淨對然の思想であつて、禪は禪淨は淨として之を混淆してはならぬ、之を混淆する弊は、平凡俗

安の墮落的念佛となり、禪宗の生命を奪ひ、禪林をして遂に枯死せしむるに至ると云ふのである。

悲○哉○大○雅○枯○れ○て○桑○間○湧○き○古○曲○啞○し○て○鄭○衛○震○ふ○百○年○以○來○眞○風○一○變○
し○て○禪○徒○醜○態○を○成○す○禪○に○し○て○淨○土○を○兼○ぬ○る○底○麻○の○如○く○粟○に○似○た○り○
昔○は○外○現○是○聲○聞○内○秘○菩○薩○行○今○は○外○現○佛○心○宗○内○秘○は○即○ち○淨○土○行○恰○も○
一○器○に○し○て○水○乳○併○せ○盛○る○が○如○し○——見○よ○西○天○の○四○七○東○土○の○二○三○及○
び○傳○燈○千○七○百○個○の○賢○聖○江○西○濟○北○南○泉○長○沙○黃○檗○汾○陽○慈○明○楊○岐○眞○淨○黃○
龍○息○耕○大○惠○の○諸○老○其○餘○の○實○參○實○悟○の○俊○英○破○口○に○も○往○生○淨○土○の○事○を○
説○か○す○專○稱○迎○生○の○事○を○求○め○給○ふ○は○半○個○も○亦○無○し○何○ん○が○故○ぞ○初○め○見○
道○得○悟○の○一○刹○那○に○南○隣○北○舍○總○に○是○れ○七○種○寶○樹○の○淨○刹○張○三○李○四○盡○く○
是○れ○無○量○壽○尊○紫○摩○金○の○全○身○な○る○を○見○徹○す○れ○ば○な○り○是○れ○即○ち○開○佛○智○
見○道○の○靈○證○な○り○此○外○更○に○何○ぞ○か○求○め○ん○彼○の○龍○樹○大○士○の○如○き○は○中○下○

の機を救はんが爲め、彼が唱へて一心不亂の處に到りていつしか唯心の淨土に投入して往生の大事を決定せしめんが爲め、且らく此の入門を設け給ふが如し、此故に彼の專稱稱名淨業の宗趣の如きは擱いて論せず、爾等身は禪門に在りて肩に心宗の法衣を掛け、口に一員の禪徒なりと稱して、内には竊に稱名念佛して禪門を汚辱し、宗趣を混亂する事は何んたる事ぞや、若し眞正淨業を追慕し、佛名を受するぞとならば、何を明白に淨家の一員淨業の上人と成りて、磔盤(吊してある鉦鼓の様な鐘)を張り、木鉦を居る、普く四衆を勸化し、晝夜に高聲念佛して大事を決定せざる、胡爲ぞ其怪しきや、他の獅子皮を着けて却て野干鳴を成す者とせんか、恰も蝙蝠の鳥にもあらず、鼠にもあらざるが如し、動もすれば禪門宗匠の眞似して、塵拂を擧揚し、竹篋を拈じ、柱杖を引く、是何れの用處ぞ、專唱稱名の人、一箇の木鉦を居

うれば足れらくのみ、何を這般の閑家具を用ゐん、法印の○を貯へ、母の鏡を愛するに似たり、云ふ事勿れ、禪にして淨土を兼ねぬるは、虎にして翼を挟む者なりと、錯々此に人あり、重痾を膏盲の間に結ばんに、其人必ず久しからずして死せん、禪若し淨土を兼ねば、其禪必ず久しからずして亡びん、(藏柑子)

是は勿論黃檗の禪風を攻撃したものであると云ふことは明瞭である。さうして黃檗の獨湛は黃檗の念佛禪を代表して居るものであつたが、白隱は直接には之を砲撃しなかつたのみならず、却つて之を賞めたやうであつたが、其の餘弊を指摘した點は、間接の射撃であつて、轉た獨湛をして顔色なからしめたものである。

或大德曰、三四十年前、有二上人、一云圓怒、一云圓愚、圓愚不知何許人、姓氏亦不詳、平生稱名專修、如救頭然、一日午三昧現前、圓解煥發、直登遠初

山見獨湛老人湛問、爾是何處人、愚云、山城、湛問、修習何宗、愚云、淨業、湛曰、無量壽尊年多少、愚曰、與某甲同年、湛曰、即今在何處、愚即握右手少舉、湛曰、爾是真淨家人也、是即予向所謂淨家、若專唱得三昧、發得必入禪門、是其證也、所恨淨而入禪底、如日裏尋星、斗禪而歸淨底、似晴夜數星、斗近聞、遠境禪林、動張磔盤、居伏鐘、高聲稱名、驚四境底、間又有之、嗟、向所謂三百年後、懸識寔可恐、自非江西、濟北諸聖、再出頭來、不能輒救、予常爲之、牙戰、膽震、忠勇參玄上士、伏薪嘗膽、宜自策進、（息耕錄開）

『遠羅天釜』では、此の圓怨圓恩の事を以って元祿頃の事として居る。元祿頃に獨湛が初山に住して居ったのは、菩薩戒を開いた元祿十年である。之は淨土から禪に入った一例を示したものであるが、斯様なことは特別例外であって、決して之を一般的に主張したのではない。否、禪が淨土を兼ねるに至ったのは、人が不治の病症に罹った様なものである。

と云ふので、禪林で鉦鼓を鳴らし、念佛を唱ふる者は、禪宗を滅亡する鄭聲である。魔音である、と謂うたのである。だから之は決して獨湛を稱賛したものではなく、却って大に之を破斥したものであつて、従つて黃檗の禪風に對する一大痛棒であつたのである。

二五 默照禪を排す

念佛禪と默照禪とは、其の外形こそ違へ、同じく見性悟道なき無智暗鈍の禪を云ふのであつて、二者は大同小異である。白隱が曾て美濃の靈松寺で見たのは、此の禪風の好標本であつたのであるが、彼の時も随分厳しく萬休をやり込めたが、今『息耕錄普說』でも、大に此の禪風を排斥した。併しそは漢文であつて、文章が六ヶしいから、大體に於いて其れと同意味である他の文を引證する。

近年處々一流の禪徒あり彼れ又少しく異にして大に同じ總に是れ
 最初鹵莽にして痛快に打發せず見道分明ならざる故に死に至るま
 で安堵の眉を開くこと能はず常に其部屬に教へて曰く只其儘なる
 が好きぞ學問して何にかせん悟り求めて何の用ぞ山賤の白木の合
 子其儘に漆付けねばはげ色もなしと云つて徒に日々目を閉ぢ頭を
 低れて坐しひた睡りに眠りて妄念を掃除せんとす如何んかせん元
 是頑鈍無明の臭袋子死に至るまで半點の光輝も亦得ること能はず
 只居ながらにして亡びんを待つのみ遁世出家の人は云ふに及ばず
 士大夫の人々も道業親切なるほど心氣次第に虚損して鼠糞の落つ
 るを聞きても心肝裂くるが如く終に自盜の二汗を引出して百藥驗
 しなく衆醫手を束ねて命根も亦保ち難きに至る自家の進趣を錯る
 事はさしおいて論せず他後法幢を建て宗旨を立て三百五百の燕顛

虎頭を喝走して天下の蔭涼樹ともなるべき底の英伶の衲子を捉へ
 て強て拗へて八識頼耶の暗窟を死守せしめ一生無智頑賤擬議不來
 底の鈍漢にしなして月を重ねて千鍛し歳を積んで百鍊すと雖も蟲
 の氣息も得る事能はず次第に志倦み體疲れて疝癖塊痛五積六聚多
 少の病苦を一身に集め載せたる底の生れも付かぬ重病の癡人にな
 りて人を見る時は恐れすくみて應對も亦する事能はず胸膈は常に
 水磨の春くが如くはては扁倉も亦眉を皺め華陀も手を下す事能は
 ざる底の必死難治の重症とならむ悲むべし佛道を成就する事能は
 ざるのみならず世路も亦廢す偏へに是れ見もせぬ見性の法理を見
 たりげに説きちらし得もせぬ佛法の奥義を得たりげに教へだてす
 る底の無眼の智識の教化に依れり此等の輩を見て志を退く底往々
 に之れ有り佛法人を得ざる事亦宜ならずや此ここに於て眞風土を拂

つて盡き、禪苑根に透つてすたる。悉く是最初真正の導師に見えず、諸方婆禪の涎唾を舐りて、頼耶業識の暗窟を認め得て、禪道佛法なりと強爲し、賊を認めて子となす底の相似の禪徒のなれの果なり。古へ石霜の諸禪師のごときは、常に參徒に垂語して曰く、一念萬年にし去れ、一條白練にし去れ、古廟裏の香爐にし去れ、と終に千衆を坐枯して、千僧の墳廟を列らぬ寔に惜むべし。(於仁阿佐美)

此の石霜は諱を慶諸と云ひ、支那唐末の人であつて、青原派下第五世であるから、曹洞の系統に屬する人である。念佛禪の攻撃が黃檗の禪風に對したと同じく、之は全く曹洞の禪風に對した駁撃である。然し默照枯坐の禪風は、番に曹洞にのみ限らないので、當時臨濟の多くは皆さうであつて、黃檗も亦左様な傾向であつたのである。蓋し默照は一般禪風の廢頽して居る時の通弊であつたからである。今日でも一般に冗談では

あるが、随分禪僧の口吻を真似て、雀はちゆ、く、だとか、鴉はかあ、く、だとか、柱は豎で、闕は横だとか、立ツて居るのも坐ツて居るのも、話をして居るのも、食うて居るのも、寝て居るのも、皆禪であるなど、平々凡々に放言豪語して居る者もあるが、白隠に聞かしたら、實に片腹痛いことなので、若し是等が一步を進めると、忽ち白隠の槍玉に上がる。此の默照枯坐の禪風となるのである。

二六 關鎖禪

白隠の排した所のものは、默照枯坐の禪風と念佛往生の禪風とであつたが、是等のものは當時の禪海に彌漫して居つた醜波毒浪であつて、滔々たる一般の禪徒を捲翻愚弄し去つたものであつた。是に於て白隠は大に是等の禪風を撥除し、真正の宗風を挽回しやうとしたのであつ

た其の真正の宗風とは果して何様なものであつたのか、是は前にも言つた様に、正受から受けて來た所の關鎖向上の禪風であつたのである。さうして、正受は先づ次の様に提唱した。

一日師舉揚難透數段因緣、示鵝林曰、此是宗門奪命神符、法窟爪牙也、四七二三列祖、唯傳此些子、到于今、寶鑑國師行脚後、此道今人棄如土、天下滔々、唯有二乘小果族、已求當家真正種草、宛如日裏尋星斗、今一掃扶桑國、唯有此正受一員、自恨未得附屬人、大法惠命如懸絲、爾勤粉骨碎身、挽回此已墜眞風、粉碎彼斷見魔黨、爲開國中興功臣、若欲折伏法滅黨、須透過千仞荆棘叢、推倒向上關鎖、若未能透過荆棘、推倒關鎖、爭得摧伏法滅魔軍、勉旃。（正受老人 崇行錄）

是は白隱が正受から聽いた言であつたが、白隱の盛んに鼓吹した宗風も亦此の外に出でなかつたのであつた。

永劫已墜せざる眞風作麼生、見性透關勇猛精進の一大事義是れなり。
（壁生草）
（卷下）

此の向上と云ひ、透關と云ひ、進修と云うたのは、皆此の關鎖禪を形容した語に過ぎないので、臨濟宗風の眞髓とするものである。蓋し此の關鎖禪と云ふのは、一回了々分明に見性することが、丁度掌上にある菴摩羅果（桃）に似た果物を觀る様にし、更に進んで種々難解の公案に參得し、難透の關門を透過し、然る後久修長養して休まず、所有内外の知識を收得して以つて人の爲にするものを云ふのである。而して奪命の神符と云ひ、法窟の爪牙と云ひ、萬重の荆棘叢と云ひ、又關鎖と云うたのは、皆此の難解の公案を稱したものである。

勸爾參立上士、大丈夫兒、要猛著精彩、一回見性、纔得見性分明、捨去參決、箇難透話頭、必定了知涅槃經所謂諸佛世尊、眼見佛性、如觀掌上阿摩勒

果、剝、徹、見、祖、師、最、後、因、緣、於、此、初、挾、法、窟、爪、牙、懸、奪、命、神、符、入、佛、界、遊、魔、界、
拔、釘、奪、楔、敷、大、慈、雲、行、大、法、施、大、利、濟、方、來、衲、子、依、舊、眼、橫、鼻、直、無、事、高、閑、
底、一、老、僧、是、爲、眞、正、佛、祖、兒、孫、報、恩、底、人、許、爾、逢、茶、喫、茶、逢、飯、喫、飯、恬、如、過、

日………
（息耕錄開）
（鑑普說）

斯、樣、の、關、鎖、向、上、の、禪、を、進、修、す、る、の、を、以、つ、て、眞、の、宗、風、と、す、る、の、で、あ、る、
然、る、に、枯、坐、默、照、の、禪、は、未、だ、向、上、の、關、鎖、を、知、ら、な、い、ば、か、り、で、な、く、又、見、
性、を、も、し、な、い、で、盲、滅、法、に、言、を、な、し、て、眼、橫、鼻、直、無、事、是、れ、貴、人、困、じ、來、れ、
ば、眠、り、飢、ゑ、來、れ、ば、飯、を、喫、す、な、ど、空、嘯、く、の、で、あ、る、か、ら、白、隱、は、容、赦、な、
く、一、大、鐵、槌、を、振、う、て、此、の、不、生、無、事、の、暗、黨、を、頭、か、ら、粉、碎、し、た、の、で、あ、つ、
て、實、に、痛、快、で、あ、る、さ、う、し、て、此、の、進、修、向、上、の、工、夫、は、何、樣、か、と、云、ふ、と、之、
は、造、次、顛、沛、常、に、未、了、の、公、案、を、參、究、し、未、會、の、話、頭、を、提、撕、し、愈、々、會、す、れ、
ば、愈、々、進、み、益、々、悟、れ、ば、益、々、參、ず、る、と、云、ふ、風、に、す、る、の、で、あ、る、

蓋、夫、參、禪、非、會、了、休、悟、了、拋、者、轉、會、轉、參、轉、悟、轉、提、是、云、未、了、公、案、莫、以、塵、
務、煩、煩、梁、跟、莫、好、恬、靜、處、枯、坐、閑、處、靜、處、行、住、坐、臥、單、單、保、重、那、裡、是、打、失、
處、那、裡、是、不、打、失、處、是、先、輩、參、禪、底、樣、子、也、（荊叢毒）
（藥卷三）

是、は、正、受、の、謂、う、た、正、念、工、夫、と、云、ふ、も、の、で、あ、つ、て、白、隱、の、活、三、昧、で、あ、る、
さ、う、し、て、此、の、參、禪、の、學、者、を、接、す、る、時、に、當、り、丁、度、老、婆、が、孫、兒、を、育、て、る、
樣、に、食、物、を、嚙、ん、で、口、に、含、ま、せ、る、樣、に、一、々、手、を、取、つ、て、教、へ、る、と、云、ふ、樣、
で、は、駄、目、で、あ、る、之、は、所、謂、老、婆、禪、或、は、婆、女、禪、で、あ、つ、て、學、者、を、誤、ま、る、こ、
と、が、甚、だ、し、い、も、の、で、あ、る、然、ら、ば、何、う、し、た、ら、宜、い、か、と、云、ふ、と、そ、れ、は、丁、
度、獅、子、が、其、の、兒、を、育、て、る、樣、に、一、回、之、を、千、仞、の、崖、か、ら、突、き、落、し、纒、に、登、
つ、て、來、る、や、つ、を、又、蹶、落、す、と、云、ふ、樣、に、千、鍛、萬、鍊、し、て、始、め、て、勇、猛、百、獸、の、
王、と、成、る、に、足、る、樣、に、す、る、の、で、あ、る、斯、樣、に、一、點、と、雖、も、學、者、の、爲、に、人、情、
を、加、へ、方、便、を、垂、れ、な、い、所、謂、涓、滴、も、施、さ、い、る、是、れ、眞、施、な、る、も、の、が、白、隱、

の峻峻な宗風、惡辣な手段であつたのである。

備看、從上宗師、點滴亦不施、是非惜法、其實惜人也、與今時往往捉頑賤無智、一縷香不堪底癡鈍漢子、提携教示、按牛頭喫草、鑽腋出翼、打許多屎尿畢、印定許可底、非霄壤遙異者耶、若有人言、我能說法、使人悟入、須知斯人非真正導師、斯人從本是非參究底人、（息耕錄開）
是れ即ち白隱が徹頭徹尾主張した進修向上の關鎖禪であつて、白隱の偉大なる精神は實に此の點に存して居つたのである。是からして其の宗風は一世を震動し、滿天下を風靡したのであつた。

二七 十句觀音經を弘む

寛保三年の秋、庫司を再營し、十二月に至つて落成し、松蔭寺は漸く其の舊觀を復して來た。其の翌延享元年の冬、甲斐の自性寺で般若心經の

活字版を印施し、翌二年に江戸の井上平馬と云ふ人が、是より先き十句觀音經を印施して居つたので、或る日書を白隱に贈りて詳しく其の靈驗を説き、且つ弘く斯の經を播布せんことを請うた。蓋し十句觀音經は支那南北朝時代の王玄謨と云ふ人が、劉宋の元嘉二十七年の頃始めて唱へ出したものであつて、爾來其の靈驗は頗る多かつたと云ふことで、吾が邦でも寛文の頃比叡山の安樂院靈空は甚だ之を尊崇して居つて、陛下へ奏問に及んださうである。白隱は是等の事や、斯の經を弘めた結果や、諸處で多くの靈驗を得たことを、其の著『延命十句觀音經靈驗記』に詳記して居る。今其の一節を擧げて、其の例を示さう。

扱も其後寶曆第三癸酉の春、駿州沼津の東なる黒瀬の渡りの南に當りて、二つ屋といへる處の去る者の一男子、十八歳の時不圖煩ひ出し、二月三月惱みしが、醫者も驗者も驗しなく、終に空しくなりければ、一

家打寄り泣き悲しむ斯かりける所へ日頃出入りし庵居の僧一兩人
行懸り此體を見るより内に入り人々よ歎き給ふは理りなり去りな
がら何程歎き給ひても更々病者の爲めならず現當二世の爲ならば
皆々打寄り十句經を讀給へと一炷の香を挟み聲高々と讀み初むれ
ば實に尤もと皆々打寄り同音に之を讀む最早百返にも及びぬらん
と思ひける時不思議や彼の病人むくくとはね起きにッこと笑ひ
嬉しやな暗き闇路を唯獨り冥土へ赴きける所へ有難や何處ともな
く大勢にて十句經よみ給ふ聲の聞えければ我も續いて是を讀む斯
かる所へ忽然と御出家一人現はれ出で爾且らく坐せよ坐してあの
誦經の聲の聞ゆる方に向ッて掌を合せて信心に同じく誦め誦まば
必ず蘇生すべきぞと御教へありければ則ち御教の通り讀誦しける
に貴とやな最早百遍も讀みつらんと思ひける時譬へば秋の月の東

の山路に登り給ふ如く四面次第に明かになりけるが覺えず斯くは
蘇生し來り侍り人々よ辛勞にはおはさめど尙を讀誦したび給ひぬ
御經の聲の耳へ入るに隨うて心も明かに氣力も健やかなる様に覺
え侍るぞやとて經よみながら食事をも平生の如く快く食べ夜明け
ぬれば最早透と全快しそこら歩き廻はりける由又御經の靈驗なら
すや
之は斯の經を讀んだ功德で死人が蘇生した話であるが此の外にも盲
者の目が明いたことや難病の治したことなどを多く記して居るが之
は白隠の通俗的教化であつて一種の精神的治療法とでも謂ふべきも
のであらう。

二八 五位偏正の秘奥を發明す

支那の曹洞宗の開祖である洞山良价と云ふ人が立てたと云はれて居るものに五位と云ふことがある。之を君主と臣下との關係で説明するからして、亦五位君臣とも云はれて居る。之は禪宗悟道の階級を五段に配置したものであつて、曹洞宗の秘訣であるのは勿論だが、亦一般禪宗の奥旨となつて居る。今之を詳細嚴密に説明することは到底出來ぬから、單に其の大要だけを解説して置かう。

(一)正中偏　正と云ふのは宇宙の森羅萬象を取り除けた裏面の本體、即ち空界を指した言葉であつて、之を君位に當てるのである。偏と云ふのは之と正反對であつて、宇宙に森然羅列して居る千差萬別の現象、即ち色界を指したのであつて、之を臣位に比するのである。だから一般に正と偏とは、空と色、無と有、理と事、體と用、君と臣、主と従、客と賓と云ふ様な反對の思想を代表した言葉であるのである。

而うして此の正中偏と云ふのは、正の中で偏を現はしたものであつて、理に反して事を現はした位である。之は吾人が意識の根柢である第八識と云ふものを打破して、一分の大圓鏡智と云ふ清淨圓明な悟道の智慧を發見證得した位であつて、其の智光が事々物々の一切現象の上に現はれて來る境界であるのである。之は華嚴の四法界では差別の現象界である。事法界に相當するものであつて、君臣の關係では君から臣に臨んだ位である。又之を易で解釋すると、巽の卦となるのである。此の卦は一陰が二陽の下に在るものであつて、巽と云ふのは遜と云ふ意味であるから、柔順であつて能く上下に通入すると云ふ義を現はしたのである。さうして其の象は風であつて、上下四方通らない處がないと云ふ意である。それで丁度之が大圓鏡智の光が偏く一切の事象に通じたのに當て填まるのである。之は吾人が悟道の第一段階である。

(二)偏中正。之は前位の太反對であつて、偏の中で正を現はしたものである。即ち千差萬別の事象を捨て、單一平等の理體に入つた位である。即ち大圓鏡智の位から進んで、第七識を轉じ、一切法空の智慧である。平等性智の一分を證得するに至る境界である。華嚴の四法界では眞如平等の本體である。理法界に相當し、君臣の關係では、臣から君を望んだ位である。さうして、易の解釋では、兌の卦となるのである。兌と云ふのは、説トク即ち悦と云ふ意味であつて、一陰が二陽の上に進んで喜悅が外面に見はれた形である。其の象は澤であつて、萬物を潤澤する意に取つたのである。之は人君の道は能く人心を悅服せしむるのを以つて本とすると云ふことを現はしたものであつて、佛教の根本原理が眞如平等の空性であつて、此の智は能く吾人を慰安せしむるものであると云ふのに當て填めたものである。已上の二位は三身中の法性の理體である。法身

に相當するものであつて、共に二乘小果の分濟に過ぎない境界なのである。

(三)正中來。

之は色空不二の位であつて、二乗の果位を出で、菩薩の境界である。上求菩提下化衆生の位置に入つたのである。即ち吾人が第六識を轉じて一切差別の現象を分別觀察する妙觀察智を證得し、以つて色空不二の妙理に進入するのである。華嚴の四法界では現象差別と本體平等との不二である。理事無礙法界であつて、三身中では果徳圓滿な報身の位に入り、君臣の關係では君主が臣民の才能を觀察して、適材を適處に置く才能適用の位である。之を易で解釋すると大過の卦となる。大過と云ふのは、大に常人に過ぎたるを意味するのであつて、此の卦の下巽上兌が遜順和悅の道を以つて行ふのを言ひ現はしたものである。其の象は棟橈であつて、棟はムナギで陽の強いのを現はし、橈は楫

であつて、陰の弱いのを表はしたもので、吾人の内心剛にして外容柔なるを現はしたものである。此の遜順和悦の大道は君民處を得て活動するのを現はしたものであつて、菩薩が上求下化の小心に當て填めたのである。

(四)偏中至。前のは平等の理體と差別の事象との不二であつたが、之は其れから一步を進めて、此の理法を事象の上に應用して來て事々物々の關係を融通無礙ならしめた位である。之は吾人の前五識を轉じて其の行業作用の應機自在である成所作智を證得した、六根六塵の無礙圓融なる境界である。華嚴の四法界では、現象相互の融通無礙である事々無礙法界であつて、三身の中では應化合同せる應身の位に入り、君臣の關係では臣民が君主を輔翼する上に於て和協一致する位である。之を易で解釋すると、中孚の卦となるのである。中孚と云ふのは、孚は信

と云ふ意味であつて、内心が誠信であると云ふ意である。二陰が四陽の間にあつて、外部が充實して居つて、内部が空虚であると云ふのを表はしたのである。其の象は豚魚である。其の内心が平虚であるから其の誠信の情は、豚や魚の様な極感覺の鈍いものまでも感動せしむると云ふ意である。之は吾人が平懷虚心誠意信情を以つてするときには、能く國家を化導し社會の險難をも容易に涉ることが出來ると云ふことを形象したものである。それで丁度成所作智を得た事々無礙の境界に當て填まることになる。之は普化や布袋の様な、混俗の菩薩の境界であるが、事相を打破して却つて事相に偏したものであつて、まだ圓滿中正の道とは言へないのである。

(五)兼中到。此に至ると四智圓滿三身具足して中道實相の佛陀の位となり、禪宗の祖師の出格の機用の存する所であつて、從つて真正の

宗匠の本領である。されば主として學者を教養する法となる。其は即ち自ら眞正の宗風を拈提し、學者をして小を得て足れりとせしめず、百鍊千鍛して始めて精金とならしむるのである。さうしてそれは丁度彼の善財童子が文殊菩薩に勧められて南方の勝樂國に到り、其の妙峰山頂に住して居った德雲比丘を訪うたとき、德雲が更に其の南方の海門國の海雲比丘を訪はしめ、到頭善財童子をして五十三人の知識に參する様な壯大勇猛な修行をなさしめて、始めて普賢の徳行を圓滿せしめたこと云ふ様な辣手段に出るのである。是に於て師資妙挾擊揚することとなり、宗風は益々光輝を放ち來るのである。斯様にして始めて眞正の宗風を維持し、其をして益々向上發展せしむることが出來ると云ふのである。君臣の關係では兩道合一の位である。之を易で解釋すると重離の卦に當る。離と云ふのは麗と云ふ意味でカ、ルと云ふ意である。之は

一陰が二陽の間に麗ッて居るのを云うたのである。さうして其の象は火である。又日と云ふても宜い。其は火の體が虚であツて、薪とか炭とか燈心とかに麗ッて明かな光線を放ち、又日月が天に麗ッて明かな様に吾人の心體が虚靈であツて、妙に中正の道に柔順し挾合して往くのを表し、君臣上下皆明德があツて、能く中正の大道に處し、以ッて天下を化育し、文明を生成するに譬へたものである。それで丁度眞正の宗風の生々流行して窮らないと云ふことに當て填めたものである。今已上の説明を一目瞭然たらしめんが爲に之を左に表示するであらう。

(五位)

(四智)

(四法界)

(君臣)

(易卦)

正中偏 大圓鏡智 事

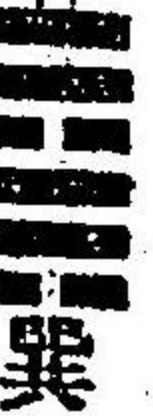
法

界

君

視

臣



偏中正 平等性智 理

法

界

臣

向

君



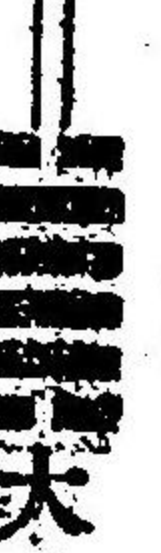
正中來 妙觀察智 理事無礙法界

君

用

臣

臣



偏中至 成所作智 專無礙法界 臣輔君 中孚 兼中到 四智圓滿 三 身具足 君臣道合 重離

而うして已上の五位は皆最後の重離の卦から變化したものであると云うて其の回互疊變を説いたものは、矢張洞山が樂山から受けて曹山に傳へたとせられて居る『寶鏡三昧』と云ふ書である。

重離六爻、偏正回互、疊而爲三、變盡成五。之は重離の卦を下から數へて二と三と四との三爻を取リ、之を二つ重ねると巽の卦が出来るも、又三と四と五との三爻を取つて二つ重ねると兌の卦が出来る。さうして巽と兌とから一卦宛取つて重ねると大過となる。是れが疊んで三となると云ふのである。それから大過の卦を逆に重ねると中孚の卦となる。之に重離の卦を加へると變盡して五となると云ふのである。已上の説明は、大體に於いて白隱の説に依り、それに

自己の意を加へてしたのである。抑も白隱は嘗て、正受の室内で此の五位疊變の眞訣を受けしたが、其の時正受は前の句の疊んで三となると云ふ處までを説明して、それから後は口を杜ちて何も言はなかつた。それで白隱は直に次ぎの變盡して五となると云ふ句の秘訣を請うた。すると正受は之はどうして一氣で極むべきものではない。仍つて是からは説明をしないが、只洞山一人の願を見て研究するが宜い。他人の説に管して狐窟に陥る様なことをしてはならぬと言うて注意を與へたのであつた。其の後又宗格から此の秘訣を受けたが、變盡して五となると云ふ處に至ると、白隱は手を以つて擲擻して、止めよ、止めよ、モウ解つた、モウ解つたと言うて、互に哄然大笑して別れたと云ふことである。それから古來の數師の解釋を見たが、熟らく思ふと、古來の諸師は偏正回互の義は於て未だ十分に解して

居らないと云ふことを發見した。そこで已前最早會得したと思つて居つた事も夢の様になり、忽ち又疑咒が頭角を突き出して來て容易に之を截去ることが出来なかつた。然るに寛延元年の夏、忽ち此の秘奥を發明して掌上を見る様であつたので、疑咒は即時に斃死して仕舞つて、歡喜踊躍の情に堪へなかつたのである。そこで寶曆元年遂に「洞上五位偏正口訣」二篇を著はし、大體に於て已上の説明を施した。

回互疊變之義、衆說繁絮、就中永覺行策二師之判、人之所論也、重離六爻、取二三四爻爲正中偏、取三四五爻爲偏中正、即見大過卦、取大過二三四爻爲正中來、於此疊而爲三之判、蓋似盡善、到于變盡成五、全未盡善、後入正受室、傳之方以爲足、猶恨諸師未及全判、偏正回互之義、似回互兩字、棄擲總不顧者、於此疑咒重舉頭、寬延改元戊辰夏、定中忽爾煥發、偏正回互秘奥、如見掌上、疑咒乍斃、不堪歡喜、欲把手口授、自愧、校老婆臭乳、染汚衲

子口頭諸子若欲究此淵源須密密體究老僧辛苦既是三十年諸子勿作容易看（辨疑卷三）

白隱は如何に此の疊變の義を説明したかは、老婆の臭乳を垂れなかつたから判明しないけれども、斯様に言うて居る所から見ても、其の見識は卓として古人を抜いて居つたと云ふことが解る。

二九 一擲を嘗めて全鼎を知る

其の年十一月同國安倍郡大岩村にある大龍山臨濟寺の請を受けて、雲衲數十人を率ゐて赴き、虛堂和尚百則の頌古を評唱し、開山圓滿本光國師二百年の遠忌を修した。此の開山は字を大休を唾び、諱を宗休と云ひ、妙心寺派特芳禪傑の法嗣であつて、天文年中駿河の太守今川義元の請を受けて本寺を開き、同十八年七月に寂したので、丁度此の年で二百

年目となるので、其の齋會が營まれたのである。此の時其の齋會が濟むと、一僧が臨濟の三關を掀翻し、長沙の七步を超過すと云ふことは何ら云ふ意味かと問うた。すると白隱は大に驚いて、所謂長沙の七步と云ふものは、到底備の境界ではない、恐らく他人の語であらうが、果して何人の語であると問ふと、其の僧、此は當寺の開山が入院の時に山門で唱へた語であると答へた。白隱は之を聞くや否や、覺えず肅容再拜して言うた。大燈、關山の二師以來、祖底は全く荒涼に歸し、宗風は全く地を拂うたと思つて居つたが、二百年以後に此の老和尚があらうとは、豫期しなかつた。時に白隱は此の一語を聞いて、全録の價值如何を推定したので、丁度梅の話を知つた様で、口中に酸味ある唾液を催し、又一片の肉餅を嘗めて、全鼎の味を知つた様であつたと言つて居る。そこで纔に梅の話を知つただけでなく、一ツ梅が食ひたいと云ふ希望が起きて、偏く全録を窺

ひたいと思つたが、最早齋會も濟んで歸らねばならぬので、其の暇が無かつたが、其後官用があつて駿府に入つたから、其の序に臨濟寺に到り、其語録を閲覽した。そこで以前度を駿府に入つた事もあつたけれども、之に氣附かなかつたのを悔ゆると同時に、今之を讀んだことを限り無く悦び、之を以つて宗門第一の書であると激賞した。

幸而今歲小春仲院爲官事入府之次、上龍山拜閱國師錄、果然與向一樹氣味、毫釐無差。升滴滴皆毒也。如鳩鳥尾、如老狼牙、文字有陶朱倚頓、富筆力有項籍、趙雲勇、奇怪有費長華、術幽豔有王昭太真、度雖慈明、垂語眞淨、小參靈源、普說息耕、上堂妙喜、長書無多、讓肌膚不覺栗栗焉、拆膝嘆不知所措、時席上有蜀錦方丈、餘者聞後奈良上皇所賜國師也、光彩奪目、驚魂、予指曰、雖這箇花錦、知貴不知價底、比國師片言隻字、香隔霄壤、傍有龍山徒梵禪人、予即告曰、吾國幸有此老和尚、不辱東海、日多懸識、此錄也。

龍門第一無比寶也。與碧巖虛堂並行無乏。可謂日多大光明也。願爲報恩繕寫一部。以壽此書。他後得同志人壽梓亦可也。吾門盛事何事如之哉。梵歡踊然諾矣。熟想予自壯歲以來。入府者太凡幾回乎。怡悅會無類者。回者歸路見人則先言此矣。（荆叢毒藥卷九）

後又大休の著である「見桃録」を見たが、其の宗風は高峻であり、學識は廣博であり、加ふるに文彩が優逸であつたので、之を激賞して休まず、海東禪門の眉目であると言つた。

宗風高玄旨密機鋒峻。看讀博文彩美。詞偈逸掌。上洞焉而目前煥乎。嗚呼。如此書海東禪門眉目也。（同上）

蓋し臨濟の三關と云ふのは、「臨濟録」に謂うて居る三句三玄三要の語を云つたものであるし、又長沙は南泉普願の法嗣であつた湖南の長沙景岑を指したのであつて、支那の五代頃の人であつた。其の七歩の語は

臨濟の弟子である三聖慧然が、此の長沙を評して、臨濟に勝ること七歩と言つたのを意味したのである。さうして大休は此の臨濟の三關を踏破し、長沙の七歩を超過すと云ふ見識であつたので、白隱が激賞して措かなかつたのも偶然ではなかつたのである。

三〇 隻手の音聲

彼の趙州の無字と同じく、禪宗入門の第一關即ち見性の第一着手として應用せられて居る公案に、隻手の音聲といふものがある。之は吾人が兩手を拍つと聲がするが、片手では聲がしない。此のしない所の隻手の聲を聞くと云ふのが、此の公案を參究する必要の起る所以である。之は白隱が始めて唱へ出したものであつて、白隱の名と共に近世の禪林では隠れのない最も著名なものであるが、白隱は何時頃から之を唱へ

出したかと云ふことを考へると、寶曆三年の著作であつた「戴柑子」に、此の五六年以來思ひ付いたことがあつて、之を唱へ出したと曰う。是れを以て假りに寶曆三年から六年を逆算すると寛延元年となるから、白隠は寛延元年の頃に始めて此の公案を唱へ出したのであると云ふことが出来る。今左に其の文を引用するであらう。

此五六ヶ年以來は思ひ付きたる事侍りて、隻手の聲を聞届け給ひてよと、人毎に指南し侍るに、従前の指南とは、拔群の相違ありて、誰にも疑團起り易く、工夫進み易き事、雲泥の隔て有之様に、覺え侍り、是に依りて、唯今專一に隻手の工夫を勧め侍り、蓋し隻手の聲とは如何なる事ぞとならば、即今兩手打合せ、打つ時は丁々として聲あり、唯隻手を擧ぐる時は音もなく、香もなし。是れ彼の孔夫子の所謂烝天の事といはんか、將た又彼の山姥が言ひけん、一丁空しき谷の響は無き音を

聞く便りとなるとは、此等の大事にや、是れ全く耳を以て聞くべきにあらず、思慮分別を交へず、見聞覺知を離れて、單々に行住坐臥の上、於て透間もなく參究し、もて行き侍れば、理盡き詞究まる處に於て、忽然として生死の業根を拔翻し、無明の窟宅を劈破し、風金網を離れ、轉籠を抛つ底の安堵を得、此時に當りて何時しか、心意識情の根盤を擊碎し、流轉常没の幻境を撥轉し、三身四智の寶聚を運出し、六通三明の神境を超過す。貴ぶべし、隻手纒に耳に入る時は、佛聲、神聲、菩薩聲、聲聞聲、緣覺聲、餓鬼聲、修羅聲、畜生聲、天堂聲、地獄聲、世間所有一切の音聲、毫釐も聞殘す事なし。是を清淨の天耳通といふ。隻手纒に耳に入る時は、自界他界、佛界、魔宮十方の淨刹、六趣の穢土、一見に見徹して、掌果を見るが如し。是を清淨の天眼通と云ふ。隻手纒に耳に入る時は、廣大劫、輪轉昇沈の跡、塵點劫後、往復遷流の影、照々焉として、寶鏡に對するが

如し。是を清淨の宿命通といふ。隻手纒に耳に入る時は、喫粥喫飯運動施爲、是れ修得底にあらず、學得底にあらず、人々本具の活三昧なる事を徹了す。此時に當りて、華嚴の四種の法界、法華の唯一乘、空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る、穢土を轉じて淨土となし、凡身を變じて佛身と成す等の大事、粲然として目前に充塞す。是を清淨の神境通といふ。隻手纒に耳に入る時は、自心他心親戚心佛心衆生心、一見して見透して疑惑なし。是を清淨の他心通といふ。隻手纒に耳に入る時は、人々本具の心上一點の無明なく、一點の生死なし、廣大圓明高闊、虛疑是を清淨の漏盡通といふ。此時に當りて、百千の法門無量の妙義、世間所有の功德聚、世間所有の寶莊嚴、盡く自己の心上に具足して、毫髪ばかりも欠闕なし。初て知る六度萬行體中に圓なる事を、人間天上の善果何事か之に勝らん。三賢四果の歡喜も、豈此れに過ぎんや。

已上隻手の音聲を説明して餘蘊が無い。之が即ち見性了々の時節と云ふものである。若し此の言外の境致が何様なものであらうと思ふならば、先づ之を白隱の評唱に聞かねばなるまい。

端午上堂曰、今日重五日、浮樓船、放華標、民皆祭、三閭大夫原之言曰、世人皆濁、我獨清、世人皆醉、我獨醒、漁父曰、既醒既清、胡爲捲狂浪、激怒濤、示憤怒於海面哉、原曰、嗟子來進、夫寶明空海、全絕纖塵、憂思悲恐、談笑戲論、盡是無不諸佛、大寂定中、微妙不思議、圓音可惜、汝未聽、隻手無生、妙聲作麼生、是隻手無生、妙聲到江、吳地盡、隔岸越山多。

(和聲卷一)

さりながら其の眞際が果して何様であるかは、讀者諸君の實驗踏査に一任するより外はない。然るに此の隻手の音聲に就いては甚だ面白い歌が殘つて居る。其れは寶曆七年の春に、白隱が信濃國下伊那郡興福寺の講に赴いた時、阿三婆と云ふ老婆が白隱に見えて詠じたと云ふもの

である。阿三婆信州上伊那郡七久保村の人、鐵交に參じて太悟すのちまた白隠に參ず、白隠の信州の講に應ずるや、阿三またゆきて相見す、白隠接するに、隻手を翫てす、阿三直ちに一首を口ずまみて呈す、いはく、白隠の隻手の聲を聞くより、も兩手を打つて商ひをせよ、白隠また自ら竹帚の圖を描きて、阿三に與ふ、阿三これに題していはく、日本の惡知識を掃くははき、先づ第一は、原の白隠、白隠微々として笑ふ、(言行錄)さすすると愁ひに、隻手の聲を聞くより、か兩手を拍つて商賣でもした方が却つて活佛法が、も知れぬ、(言行錄)三十一『槐安國語』大燈國師といへば、諸君も知つて居らるゝ通り、京都紫野龍寶山大徳

寺の開山であつて、字を宗峯と稱し、諱を妙超と云ひ、南浦紹明の法嗣で、妙心寺の開山である、開山慧玄の師匠であつた、其の識見と云ひ、學問と云ひ、文才と云ひ、優秀卓絶なものであつて、吾が邦禪僧中古今獨歩の英傑であつた、其の語録はこれを『大燈語録』と稱して五卷ある、曾て正徳四年、白隠が美濃に居つた時、此の語録を読んだことがあつたけれども、其の當時は、附言剩語の文字禪であるとして、多く顧みなかつたが、それから三十餘年を経て、寛延二年正月となつた、此の時住山の門弟子は凡そ百人程あつて、實に極盛の運に達して居たが、茲に門衆は古今獨歩の名著である『大燈語録』の講評を請うたのである、白隠は再三之を辭したが、益々請うて休まない、さうして言うた、師は『碧巖錄』を講せらるゝでほな、いが、碧巖と本錄とはどれ程底運があるか、本錄の講がいはないならば、碧巖の講もいけな、いでほな、いが、若し碧巖の講がよいならば、本

録の講も亦よいではないかと。理窟逼めに攻めて来たので、白隠も稍や
 逃路を失うた様で、おツたが、又一溝を設けて言うた。碧巖は世間既に用
 びて居ることが久しいから、註釋もあるし、傍訓もある。然るに本録に至
 ツては、古來まだ手を着けた者が、ないから、標註や傍訓が無いのみなら
 ず、句讀も亦無いではないか、又之を講ずるにしても、其の書は甚だ乏し
 いから、殆ど不可能ではないかと。然るに門弟子等は既に計畫をして居
 ツたので、答へて言ふやう、斯様な事は弟子等不敏と雖も、其の任に當り
 ましやう、師唯は評唱一返せらるれば十分であると、それから京都に上
 り、大徳寺に到りて、百餘帙を印刷して来て、事實を考證する者や、字義を
 校讐する者や、訓點句讀を施す者や、各分擔して、先きの條件を遺憾なく
 具備した。かうなると、最早白隠も斷ることは出来ないので、其の校定訓
 讀註釋を加へられた印本を携へて、曾て「息耕録」を評唱した時の様に

先づ石井氏の宅に入ッて之を繕いたさうして、次第にこれを讀んで評
 唱を加へて行くと、先きに閑文剩語であると云うて放棄したもののは、句
 句光焰萬丈であつて、言々金聲玉振と云ふ有様で、丁度群玉の府に入り
 曼華の林に立ッた様な感じがして、始めて本録の眞價を認め、忽ちにして
 一唱三嘆するものもあれば、忽ちにして、牙戰き股震ふこともあつて、悲
 喜交も集まり來り、此の千古無比の金文を賛する言句に窮した様であ
 った。

今歲寬延己巳春、住菴千指諸子、乞提唱之、喝走不止、三止四請、終纒緇卷
 帙、毒焰照膽、怒氣徹骨、一唱三嘆、每對卷牙戰股震、悲喜交湧、一者悲如是
 大光明如此、大寶聚終無人願、二者喜澆末輕浮、遠孫薄福昏愚野夫、何幸
 拜披此金文、茲効大師雪竇錄、做拭羶羊眼、抽狐狸智、謹每句下語畢、非是
 求聞達於當世、結勝緣於不朽、(垂示)

其の賞賛は實に至れり盡せりと謂ふべきである。又趙州勘婆の拈古に至り、激賞して措かず、雲門の再來であり、雪竇に勝ること七步であると嘆じた。

舊參破滌六七疊相隨請不止於此燒香禮拜下語者七八句諸子慶賀讚嘆如見夜光子亦日進不屈如入群玉府似立曇華林不時大展炷拜不時大笑獨語動欲忘食味者數次終到拈古趙州勘婆則師拈語云盡言日下挑孤燈殊不知失錢遭罪予一見不覺吐舌不遑裝香禮七八拜自彈指懺悔曰嗚呼如龍寶國師大和尚者參學精華也不知幾生大善知識乎雲門再世誠不錯到日下孤燈一語勝雪竇七步可驚可懼吾輩張弼羊眼特孤狸智拈弄下語大錯了（後記）

斯様に激賞讚嘆の間に、其の年八月二十五日に至つて全く下語を畢り、其の偈頌は圓悟の「碧巖錄」に倣ひ、其の法語は大燈の「參詳語要」に擬

し、遂に白隱が畢生の心血を凝いた一代の快著は完全したのであつて、「槐安國語」と名けられたのであつた。此の槐安國と云ふのは支那の故事であつたので、淳于棼と云ふ人が或る日其の宅の南にあつた一株の大きな古い槐の下で酒を飲み大に酔うて家に歸り酔倒れて臥たところから夢中に二人の使者が来て槐安國王からの御迎であると言うて干棼を引いて彼の古槐の洞穴に入らしめた。干棼は凡そ數十里も行つたかと思ふと、一大城郭があつて、其の城門の樓上に大槐安國と題した大きな額が掲げられてあつたと云ふ事から取つたものである。之は白隱が謙遜をして、本録を評唱したのは一場の夢語であつて、恐らくは大燈の真意を發揮したものではないと云ふ意味から、斯様な譬喩的の題名を擇んだのである。翌三年七月遠江國小笠郡大阪村貞永寺の全乙と云ふ人が之を刊行し、八月白隱は其の請を受けて、開山南溟殊勝禪師の四百

五十年忌を修し始めて之を提唱したのであつた。若し大燈を雪竇に比するならば、白隠は圓悟に擬すべきものであつて、従つて『槐安國語』は吾が邦の『碧巖錄』であると言つても宜しいのである。現今禪宗で珍重せられて居るのも決して偶然ではない。

三二一 池大雅來り謁す

其の年の冬播磨國明石の龍谷寺の請に赴いて、『息耕錄』を評唱し、翌寶曆元年の春備前岡山の少林寺で川老金剛經を講じた。當時の岡山城主池田侯は名を繼政と云ひ寶曆三年致仕して僧となり空山と號した人であるが深く白隠に歸依して居つたので、或る時松蔭寺に備前燒の大播鉢を寄送したと云ふ奇談がある。岡山城主池田侯深く白隠に歸依し、しばしば來りて心要を問ひ、時と

して曉に徹することありき。寶曆中侯また江戸に來るの次、駕を原驛の本陣渡邊氏に駐めて、白隠を松蔭に訪ふ。時に典座の僧、厨庫の大播鉢を破る。白隠時節到來と言ひしまゝ出で、侯を室に迎へ、談笑刻を移す。侯去るに臨みて言ふ、今日は徹行にて従者なく爲めに見參の禮を缺けり。老師もし望む所あらば他日これを呈せむと。白隠いはく、林下枯淡なりといへども足らざるものなした。即今厨庫の大播鉢を破れり。請ふ之を贈りたまへ。侯いよ、白隠が心事の清淡なるに感じ、岡山に歸りてのち備前燒の大播鉢數箇を作らしめ、驛馬を馳せて之を松蔭に送りきといふ。(近世禪林言行錄)之で白隠の性情が實に淡泊であつたことが解る。岡山よりの歸路京都に立ち寄り、高倉の世繼政幸氏の宅に館した。此の世繼氏は白隠を播磨まで尋ねて往つた人であつて、甚だ歸依して居つたのであつた。時、池

大雅が面會に來た。大雅は名を無名、字を貸成、通稱を秋平と云ひ、大雅又は九霞山樵と云ふのは其の號である。京都の人であつて、當時畫の大家として有名であつた。勿論畫の材料を採る爲めではあつたが、富士山に登ることが好きであつて、前後三十餘度に及んだと云ふが、一度も同じ路からは登らなかつたさうである。其の外頗る奇行に富んだ人であつた。『近世禪林僧實傳』の中に、彼が白隱に呈したと云ふ詩が一首載つて居る。

耳豈得聞隻手響、耳能沒了尙存心。

心能沒了尙難得、却識師恩不識深。

之でまあ大雅も白隱に參じて隻手の聲を聞いたものと云ふことが出來やう。尙は大雅は白隱の高弟であつた。遂翁とは尤も親密に交際して居つたので、遂翁の畫は皆大雅から學んだものである。遂翁は白隱の門

弟中で大器、遂翁と稱せられた人で、舊名を慧牧と呼び、後ち元直と改め、別に浮島と號して居つて、下野の人である。天性卓犖不羈であつて、酒と碁と畫とを好んで居つた。延享三年年三十で白隱に參じ、門下に居ること三十年で、松蔭を距ること三十餘里の葦原の西青島と云ふ處に庵居し、講日でなければ、鶴林の門に入らなかつたが、其の參會したときも、講演が濟むとさつさと歸つてしまつた。或る時大雅に山水圖や圍碁の圖を畫かして、自ら之に贊をしたこともある。抑も白隱は風流畫に妙を得て居つて、其の氣韻が頗る高逸であつた。京都の某氏の如きは、其の遺墨を三百餘種も藏して居られると云ふことであるから、なかく盛んなものである。然るに其の畫は多く遂翁から學んだやうに傳へられて居る。

ちか頃興津清見寺眞淨老師の語られしといふを聞くに、遂翁和尙か

つて達磨、観音布袋そのほかさまの畫をつくりて白隠和尚に呈せしを、白隠和尚すなはちこの圖に依りて之を別紙に寫して、人の乞ふまゝに與へられしとぞ。(佳話)

さうすると大雅は禪を白隠に問ひ、白隠は畫風を大雅に學んだものであると云ふことも出来る。今白隠の畫を以つて大雅の畫に比べると、其の氣韻が甚だ酷似して居る様に思はれるのである。然るに、又白隠の墨蹟に就いては、一の逸話が傳はつて居る。それは松蔭寺の門前に一軒の豆腐屋があつたが、其の家の主人は常に松蔭寺に出入して、白隠に參じて居つたので、人が往々此の主人から頼んで貰つて、白隠の墨蹟を請うた。然るに白隠が若し容易に其の需に應じない時には、其の豆腐屋の主人が自ら揮毫して、白隠の落款を求めた。此の人は元來白隠の墨蹟を真似ることが上手であつたので、白隠は常に之を賞賛して休まず、或は落

款を與へたり、或は自ら其の墨蹟に署名して他に與へしめたと云ふことである。之で其の性行が甚だ磊落であつたと云ふことが解るが、今白隠の墨蹟として傳はつて居るものには、其の實豆腐屋の主人の眞蹟も随分多いことであらう。

却説それから白隠は花園妙心寺に入り、塔頭養源院で『碧巖錄』を講じたが、時に寶鏡、光照の兩公、主や皇女の清淨光院が其の席に臨み給ひ、葉室一位や冷泉黃門などが之に陪侍したと云ふことである。

三三三 無量寺建つ

寶曆二年の四月、雲門山無量寺が落成し、白隠持其の請を受けて開山の儀を舉げ、弟子東嶺をして之を主らしめた。此の無量寺は駿河國富士郡比奈村に在つて、松蔭寺の末寺であつた。故は同村の春日社の北面に

在りて元祿の初め信州の獨園と云ふ人が其の廢趾を修し、一の茅庵を結びて居り、又延享の末に、法弟の快龍が之を復興しやうとしたけれども成らないで寂したので、同村の石井玄徳や古群兼通や杉山宗信やの三人が、其の遺志を繼いで回復に勉め、今の地に移して無量寺と號し、此に至りて落慶の供養を修したのであつた。是等の三人は、享保五年の冬、白隠に參じ、眞參禪子の始めと云はれ、後此の無量寺に住した脱上座と共に、同盟を作つて參禪して居つた人であつて、脱公と共に世人から比奈の[○]一[○]公[○]三[○]伯と稱せられて居つた人である。さて其の地は有名な竹取屋敷と傳へられた處であつて、寺の前の畠は竹取の翁が籠を造つた處だと云うて、之を籠畠と稱して居つた。此の翁は初め富士山の麓に居つて竹を種ゑて生業を營んで居つたが、或る時篋の中から鶯の卵を見つけたので、大切に之を暖めて置いて、時經てから見ると、容貌頗る美麗な

少女となつて居つたので、養女として姫々と呼んで愛育して居つた處が、或る日翁が農業で忙しかつたので、養母が姫に命じて、忙しい時はちと手助けをしたらよからうと語氣荒く言うたので、姫は大に之を不満に思ひ家を出て富士山の絶頂に逃げて行つたと云ふことである。其の後姫の名を赫夜姫と云うたと傳へて居る。白隠は其の著「草創記」に此の傳説を記載して居るが、兎に角斯様な傳説があつたので、頗る興味ある土地である。此の冬京都の世繼氏が佛舍利七粒を東嶺に托して無量寺に寄附し、又其の家屬の堤行盛といふ者が來て、世繼氏が小原の窮民を賑はしたと云ふ事を語つたので、白隠は「舍利塔記」を撰し、又世繼氏賑窮民圖を畫いて之に賛し、以つて世繼氏に贈つた。其の賛は左の様である。

繼氏名政幸、參禪常勇猛、修萬善不倦、菩薩行無飽、去年來明石、破子兩重關、聞子隻手聲、能止一切音、雖未上子堂、證據入子室、如來真骨身、得分粒

七願、盛金玉寶塔、附圓慈歸種、寄于雲門山、爲法城鎮護、遠近隨喜、來往如蟻、列寶曆壬申、齋積雪二三丈、鞍馬到小原、民村三十區、凍餒不甦、種既經六七日、政幸聞此事、心大悲歎曰、縱傾盡資財、一生嘗艱辛、誓救此必死、何忍居見之、家屬堤行盛、扶繼氏美志、涉雪八九里、處處告此事、窮民大得力、悉皆欲蘇活、馱載馬來、盡分施米穀、如繼堤二子、塵中希有士、繼若微堤、勇豈成此大義、堤亦微繼富、何行此慈善、(刑叢書卷八)

之下世繼氏の爲人が博愛的で又獻身的であつたことが知れる。之も白隠の感化に負ふ所が多かつたのであらう。それは白隠が或る時西國の大名を誠めて無理に黍餅を食はしたと云ふ一事に徴しても知ることが出来るのである。

西國の藩大候某、江戸に行くの次、白隠に謁して垂示を乞ふ。時にたまに村婦あり、來りて黍餅を供す。白隠すなほち執つて之を候に進む。

侯色沮みて食ふこと能はず。白隠叱していはく、強いて之を喫せよ。小民の疾苦を知ることを得べし。老病が垂示此れに外ならずと。侯大に感謝しきと云ふ。(近世釋林言行錄)

之は頗る痛切な教訓であつて、當時下層社會の生活状態を知らなかつた大名を感動せしめたことが少くなかつたであらう。世繼氏も亦斯様な教訓感化を受けて、斯くの如き仁慈の行爲あるに至つたのであらうと思はれる。

三四 三教一致

三教と云ふのは、諸君も知つて居らるゝ通り、佛教と道教と儒教とである。是等三教の一致論は、支那にも日本にも古來多く唱へられたものであつたが、白隠も亦一致論者の一人であつた。或る時三教一面圖と云

ふものに賛辭を題して、

三面一頭老骨樞、斯人而各有斯病、
聯尊往古丘當處、調御獨誇未現過、

と曰うて老子は復古的で大古の自然を理想とし、孔子は現實的で仁義禮智信と云ふ様な現在社會の倫理道德を唱へ、釋迦は過去、現在、未來の三世を設けて、原因結果の理を明かにしたと評して、各教の特長を擧げた。乍併能く其の精神に立到ると三聖皆一致するのであつて、従つて三教は一點に歸着すべきものであると言つて居る。主として之を主張したものは、寶曆四年十月に著はした『三教一致の辯』である。之は無論三教一貫論を主張したものであるが、之を以つて見ても、其の學問が該博であつて、法相や三論や天台や眞言や律や淨土やの諸學を窺ひ、老子や莊子や孔子や孟子や、荀子や、朱子やの諸子に涉り、兼ねて神道にも及んで

居つたことが解る。

神佛の一致に關しては、既に之を辯じたが、之を合せると四教一致になる。今三教の一致を辯ずる前に、先づ儒釋二教の一致を辯じやう。白隱は此の様に思つて居つた。人が禪を修して、寥々悠悠々として、是非得失の一般である境地に至ると、之は大學に謂うて居る所の止まるを知つて、後に定まること有るものである。進んで一旦豁然として開悟するに至る時は、定まりて後に能く靜かなるものである。是に於て心性の圓明清淨であることを知り、至善の域や、明德の境に到ることが出来るのである。

寥々然たり、悠悠然たり、吉凶榮辱にも障へられず、是非得失にも奪はれず、動處靜處、是處非處、總に一般なることを覺得せむ、是れ即ち彼の止まることを知つて、而して後に定まることある底の時節といふ、此

に至りて是れいとせしめて、纏々密々單々に相續して行くときは、一朝年ち彼の臘庵が譚は、力を用ふることも久うして、一旦豁然として貫通するに至つては、衆物の表裏精粗到らずといふことなしといへる底の大歡喜は、掌を見るが如けむ。是れ彼の定まつて而して、後に靜かなる底の寶處なり。此に至つて初めて人々具足の明德、本來圓明に、本來清淨なることを徹證す。貴ぶべし、靜の一字、動靜の靜に、あらず、深山古廟、裏寥々寂々底の靜に、あらず、文字を以て寫すべからず、言語を以て演ぶべからず、至善に止まることを勤めて、清苦歲月を重ぬる人にあらざるよりは、夢にも會て見ることもあたはじ。然らば即ち敬しても敬しつべきは、至善なり、勤めてもつとむべきは、明德なり。

是れは儒教の明德、至善を以つて禪宗の見性の極致とし、禪定の寶處とし、諸佛無上の妙道であるとするものである。蓋し、白隱は儒道を以つて

彝倫の間にのみ限ることを排し、孔子の仁は韓愈が解釋した様に、博愛是を仁と云ふと説いたのは、淺薄であるとし、子貢が夫子の性と天道とは得て聞くべからずと云うたのを非とし、朱子が之を註釋して、性と天道とは夫子が罕に道ふものであると云うたのを破し、孔子の我が道は一以つて之を貫くと云うたのは、天道と人道とに貫通した大道であつて、即ち仁であるとした。さうして曰うた、大凡佛理の源底を究むる時は、必ず仁道の本根に徹底するものである。是に於て顔回が之を仰げば、彌よ高く、之を鑽れば彌よ堅く、之を瞻るに前に在るかとするれば、忽焉として後に在りと言つたのは、大道即ち心性を形容した所の至妙の言であるとし、進んで論語の里仁と郷黨の二篇は、孔子の恭謙閑雅の態度や、風流溫籍の體裁であつて、聖徳の餘波枝末であると云ふ説を錯つて居るものとして、斯様に曰うた、里仁と郷黨との二篇は、佛教に法華經のある

様なものであつて、是を讀むと、覺えず人の心をして消和せしむる事が、丁度朝暎が光を放つて霜や露を乾す様であつて、千載の下夫子が儼然として在す様である。縦令海の様な口でも之を讚嘆し盡すことは難いと論及した。次に更に朱子を批評して、朱子は元來參禪工夫した人であつて、所謂一旦豁然として貫通したと言つたのは、大道の淵源に透徹したものであつて、普通一般の儒者の到底及ぶべき所でないだからして六經を縦横無盡に註釋した。實に儒者中の泰斗である。けれども尙ほ最後の兩重の關鎖を隔て、祖庭は天涯遙かである。そこでまた孔子の境界に達しないで、性道の註釋などを誤つて居ると言つた之を要するに孔子や顔子の境界は佛陀や祖師と一致して居るけれども、朱子や韓愈や子貢の如きは未だ及ばないものであると評斷したのであつた。是から更に進んで、三教は其の根本原理が一致するものであると云ふことを主張した。

昨日三教聖人の贊辭に、三教一致一致三教畢竟如何在止至善と書き送りけるに、至善の兩字得てきつべしやとの書面、近頃奇特千萬の好一揆、隨喜の餘り、取りあへず、大略書付け進覽致し侍り。大凡三世を貫通し古今を銷融するものは至善なり。大凡聖經賢傳諸子百家數萬卷の書籍を超越して、最尊最上第一なるものは、至善なり。昔黃帝遙に廣成子が巖窟を尋ねて、大道の至要を求め給ふ。廣成子が曰く、陛下若し大道を求め給はば、齋戒沐浴七日を歷て來り給ふべしと。帝教へに任せて三七齋戒して行き、道を求め給ふ。廣成子が曰く、至道の極昏々黙々たり、至道の精杳々冥々たりと言ひ畢りて、眼を收めて總にも言はず。大凡十方の聖賢古今の智者至善に止まることを勤めて、而して後に明德を明かにし、大道を成就す。禪門には是を自性本有の至

要とし、律家には是を無相心地の戒體とし、密乘には是を阿字不生の
 日輪とし、台教には是を法性寂然圓頓止觀の大事とし、淨家には是を
 唯心淨土六十恒河俱底那由多句の如來とし、老莊は是を虛無の大道
 とし、神家者は高天原と相傳す。三世古今の間に至善を精修せずして
 法成就に至るものは半箇もまた無し（三教一致辯）
 さうして此の根本原理である至善の本體たる心性は元來名狀すべき
 ものでないからして、儒道釋の名は固より無い。強ひて之を儒と云うた
 り、道と名けたり、佛と稱しても、畢竟至人の笑を招くに過ぎないもので
 あるとした。

豈知んや、人々本具の佛性は是を菩提と名づけ、涅槃と稱し、儒門は是
 を至道と名づけ、明德と稱す、李聃は虛玄と名づけ、孟軻は浩然と云ふ、
 各々の所見淺深なきには非ざれども、是只一也一なりと雖も、諸稱一

も相當らず。是を儒なりと言はんとなすれば、丈夫面上眉を畫くが如し。
 是を佛と言はんとなすれば、新婦領下に鬢を裁るが如し。傍觀腹を抱へ
 つべし。儒に非ず、佛に非ずして、能く仁に能く、義なるものは、其れ只心
 性か。（鬼神使務）

之を要するに、神儒佛道を打して一團となし、以ッて其の禪海に歸入し
 たものである。

三五 『寶鑑貽照』を著す

かくて寶曆八年の春、美濃國安八郡神戸村の瑠璃光寺に趣き、愚堂の
 百年忌を修し、『碧巖錄』を提唱した。蓋し愚堂は寛文元年十月に寂したの
 だから、其の百年忌は寶曆十年に相當して居ッて、此の年では二年を取
 越したものである。時に白隱は七十の高齡に達して居ッたので、門弟子

等は之に應ずることを阻んだけれども、白隠は死ぬまで活動しやうと云ふ嬰鑠たる氣象であつたから、なほに法の爲には固より身命を惜まないと言つて、強ひて之に應じたのであつた。其の時書を四方に發して老僧此の間愚堂國師百年の遠忌に値ひ、瑠璃光に在つて『碧巖錄』を講ずるから、若し國師の法恩を憶ふ者があつたなら、咸來つて炷香禮拜せよと曰うたので、其の門下であつた良哉や鐵肝や靈源や空印や天瑞等の諸師は皆集まり來り、東嶺も亦其の會に陪して分座説講した。實に白隠末後の盛會とも謂ふ可きものである。時に又書を愚堂派下の諸老宿に致して、愚堂の語録を上梓せしめやうと懇懇したが、衆議紛然として決しなかつたので、慷慨不滿の情に堪へなかつたが、其の齋會も畢つてから、覺林、瑞鷗、清泰、梅龍の諸寺に應請し、次ぎに栽源、玉龍の二寺を経て、宗猷寺の請に赴く途中で『寶鑑貽照』一卷を著はし、大に愚堂派下諸老の頑

冥固陋なるを憤慨した。蓋し寶鑑と云うたのは愚堂の證號を大圓寶鑑國師と云うたからである。

大圓寶鑑大禪師、兒孫既垂數千箇、
開榛地亦數十區、可謂高德無等匹、
其錄應有三五卷、清書現今在兩刹、
濃真正兮勢中山、語句峭峻超古今、
可謂法中大法財、有僧恐此書泯滅、
尋常攢額悲歎曰、此書寔夜途玉炬、
又非霧海南針哉、棄擲置古紙堆中、
不久葬蠹魚腹內、決定隻字不傳世、
若其國師兒孫者、豈居忍見此荒蕪、
後來派下布衲子、呼何爲乃祖宗要、

願壽梓永照暗區
 派中諸老壯此語
 各勤志將成大義
 茲有立枯瞎眼兒
 橫類擲揄佞言曰
 不可不可何容易
 國師向上無畏法
 不可妄落流俗手
 縱使輕上梓上去
 奪命秘曲賞音稀
 無買一紙得見者
 不如藏櫃深處往
 於此衆議乍散解
 終廢希有大盛事
 備是誰家不祥子
 可謂無智阿闍提

此の文はもつと長いが随分ひどくやつたものである。然し禪宗には由來斯様な陋見を以つて高しとして居る者が多かつたのである。是等も矢張り白隠の撃つた黙照枯坐の一類であるが、當時臨濟宗でも随分此の黨の跋扈して居つたことが推測せらるゝのである。それから龍門林

泉、妙樂三寺の請に赴き、船に乗じて伊勢桑名に下り、白子の龍源寺に於て寶藏論を講ずること一ヶ月餘了りて天祥寺に入り、歸路尾張に出で、熱田の龍珠寺や、名古屋の白林寺に赴き、遠江の地藏寺を経て其の冬無事松蔭に還つた。

三六 龍澤寺建つ

其の年門弟子等は、伊豆の龍澤寺の廢基を興さうと云ふことを企劃した。此の龍澤寺は圓通山と號し、臨濟宗妙心寺派であつて、伊豆國君澤郡澤地村に在る。故は同郡柏久保村愛宕山の下に在つて、弘法大師の開創した寺であると傳へられて居つたが、江戸時代の初世、天外と云ふ人が之を臨濟宗に改めたのであつた。然るに其の後大に廢頽したものと見え、寶曆八年に白隠門下の諸士が相謀つて、其の寺基を贖ひ、同九年の

春に至りて再營粗ぼ落成し、十年二月白隱は請を受けて關山の儀を擧げ、四月東嶺をして其の席を繼がしめたのであつた。東嶺は諱を圓慈と云ひ、別に不々道人と號し、中村氏を姓とし、近江國小幡驛の人である。體質は薄弱な方であつたが、なかく緻密な性質の人であつて、白隱門下中で、微細東嶺の稱があつた程である。初め日向に往いて古月に參じ、歸りて近江櫻谷に寓し、寛保三年二月年二十三で白隱に謁して侍者となり、數年の間に盡く白隱室内の事を參得したが、病を得て京都東山に隱棲し、一日忽然として白隱の機用を徹見し、延享三年正月書を松蔭に贈りて所見を呈した。白隱之を一見して其の法源に徹したのを知り、偈を贈りて之を證明した。

錦江藻裏錦鱗子、撥轉龍門管萬危。
佛海波浪任君弄、不施涓滴是真施。

時に年二十六であつた。寛延二年十二月再び白隱に參じて印記並びに金襴衣を受けた。遂翁は東嶺を評して、少壯で吾が老漢に従ひ、盡く屋裡の法財を奪却した者は、東嶺一人のみであると言うたが、實に東嶺は白隱門下中唯一の俊傑である。さうして今此の龍澤寺の席を繼いだのであつたが、其の年の秋寺地を易へて今の地に移し、同十一年九月工事完成し、白隱を請じて慶讃供養を修した。時に闍衆百餘人皆偈を以て之を賀し、極めて盛會であつた。白隱一日寺園を經行し東嶺に向つて曰く、固なる哉地基美なる哉山林と、乃ち筆を採り書して曰く、老僧百年後全身を此に空むべしと。同十三年正月微恙に罹り、日ならずして瘥へたが、是からは衰勞頓に加はり、同年三月江尻慈雲寺の請を受けて、『松源録』を評唱し、合衆二百餘人もあつたが、機智更に爽快でなく、講筵頗る疲勞を感じ、十一月に至ると衰勞益々加はつて來て、弟子の狼狽は一方でなかつ

た。然しながら、白隱の氣象は甚だ盛んなものであつて、常に勇猛の二字を以つて念頭に掛在して居つた。其の年十二月十一日の夜夢中、既に故人となつた舊友や其の他愚堂や大愚や至道や正受や及び陽春や古月やの諸師に逢ひ、勵聲して彼等の隊中に入らずと喝破し、翌明和元年二月末後の會を開いて『大應錄』を評唱した。時に清衆七百餘人、龍津、大蟲、葦津、東嶺、遂翁等俱に内外の事務を執り、規律頗る嚴肅であつたが、三月に至ると又大に疲労を感じ、葦津に命じて分座助講せしめ、東嶺は別に南浦の塔銘を講じたのであつた。此の葦津は出雲の人で、久しく白隱に參じ、門風頗る峻峻な人であつて、室中常に白刃を置いて人を接し、若し躊躇する者があると、電光一閃して之を逐うたと云ふ傑物である。其の月會を畢ると、間もなく遂翁は京都に上りて妙心寺第一座に轉じ、號を遂翁と呼び名を元廬と改めた。蓋し遂翁初め自ら醉翁と號したさうで

あるが、或る人が其の理由を尋ねると、自分は酒が好きであるからだと言へたので、其の人が實に甚しいではないか、醉翁を遂翁に易へたらどうだと言ふところ、亦それもよいと言ふて遂翁と號したと云ふことである。かくて七月松蔭寺に歸りて寺務を囑托せられ、白隱の寂後は其の席を繼いだのである。

三七 清女の木像

古來禪僧の多くは其の性行が純清高潔であつて、又洒々落々として居つた。従つて奇談逸話に富んで居るのであるが、白隱も亦其の數に漏れなかつた。此處には其の奇談中の奇談、逸話中の逸話とも謂ふべき、最も奇抜なるもの一二を語るであらう。そは孰れも婦人に關したものである。抑も當時の攝政關白であつた近衛公は、名を内前と云ひ、法號を大

解脱院殿と號し、寶曆七年三月に關白となり、同十二年七月に攝政となられた。夙に白隱の英名を聞知して居られたが、翌十三年偶然駿河を通輿の際、白隱の禪關を叩かうと思ひ、當時柏原で有名であつた、鰻蒲焼の茶屋である田子屋と云ふ家に小憩し、其の夜は柏原の本陣である浮島氏の邸に宿した。田子屋は浮島氏の邸の西隣にあつたので、頗る繁榮を極めて居つたのであつた。然るに田子屋の主人鈴木佐右衛門は平素佛敎に歸依して居つて、特に白隱の敎化を受け、其の次女であつたお清と云ふのも、容姿端麗であつて、頗る孝心の深い娘であつたが、亦白隱の愛撫を蒙つて居つた。其の夜、白隱は公の旅館である浮島氏の邸に到り、杯盤の間に唱和して、其の旅情を慰めたが、其の席上で偶ま左の俗謠一句を謳うた。

東○柏○原○田○子○屋○の○娘○姉○は○廿○一○妹○は○二○十○妹○ほ○し○さ○に○御○立○願○と○つ○て……

時に公は、默聽沈思之を久しうして謝して寢室に入り、坐つた儘で少しも睡らない。そこで従者や浮島氏は、何か公の不興を惹起したのではないかと危懼の情に堪へないで、之を白隱に謀つたが、白隱は少しも憂ふることはいらぬ。關白は今夕大歡喜を得給うたのであつて、其の不眠は卿等が知る所ではない。若し強ひて其の事由が知りたいならば、隣家の清女に就いて之を質せと言つたので、之を清女に問うたが、清女は只笑ふばかりであつて、何とも言はない。そこで浮島氏等は終に其の意を解し得なかつたが、明朝になると公は浮島氏を介して、清女を京都に致さしめやうとした。之を聞いた者は皆其の榮達を羨まない者はなかつたが、何故か清女は之を喜ばないで、父母が年寄つて居るのに孝養を缺くのは忍び難いと言つて、堅く之を辭退し、餘は涕泣するばかりであつた。是に於て浮島氏はどうして宜いか更に解らないので、之を白隱に諮つ

た。時に白隠は已むことを得ず書を裁して調停の勢を取り、翌明和元年八月自ら清女の木像一軀を刻して之を公に贈り、清女の奉侍に代らしめた。其の後數年にして清女は夭折したので、公は鈴木氏の悲歎に同情し、彼の木像を田子屋に贈られたと云ふことで、今は沼津の和田氏が藏せらるゝさうである。此の歌で見ると、白隠は清女を近衛公に推薦した様にも見え、又反對に公を冷かした様にも見える。又其の木像を贈つたのは頗る滑稽な様にも考へらるゝ。兎に角清女は斯様な人の妾たることを好まなかつたのであらう。之を白隠の艶聞と解するのは、餘り穿ち過ぎた見方であらうと思ふ。

然るに別に又一の艶聞がある。否之は寧ろ一の醜聞であつて、白隠が嘗て原驛某商家の一女子と通じて、一兒を分娩せしめたと云ふ奇談である。

原驛の商某といふ者あり、平生ふかく白隠の高徳に歸依し、しばしば財物を供養す。某の女たま／＼その家奴と通じて一子を擧ぐ、某殿に之を責め問ふ。女すなはち欺きていはく、實は白隠和尚と通すと。某いたく怒りていはく、我れ十年かくの如き惡禿顔を供養す、臍を噛むも及ぶことなしと、直にその子を抱きて松蔭に來り、之を白隠の膝下に投じ、口を極めて白隠を罵りて去る。白隠また争はず、飴をもてその子を養ひ、常に之を抱きて眠り、あたかもおのが子のごとし、見る者もまた實に白隠が某の女と通じてまうけたるものとなしき。ある日雪のふりけるに、白隠また例の如く子を懷にして分衛す。某の女これを見て大に悔い、泣いて實を某に訴ふ。某驚きて措く所を知らず、馳せ來りて白隠の膝下に伏してその事の由を語り、かつ涙をふるひつゝ言ひけるは、やつがれ闇愚にして師の活佛なることを知らず、さきに惡舌

を弄したることのおぞましますよ、願はば我が罪をゆるしたまへと、白隠莞爾として笑うていはく、この子また父あるかと、毫も之を意に介せざるものごとし、某ますく敬仰しきといふ。(近世釋林言行錄)勿論是等は皆白隠の性格を傷けるものとはならないので、却つて其の襟度が濶大であつて且つ洒落であつたと云ふことを顯はすべく傳へられて居るのである。然し白隠は襟度が濶大洒落であつたには相違ないけれども、彼の頑極が白隠の行業は取るに足るものがないと評して居るやうに、白隠は活佛ではあつたらうが、亦一箇の人間であつたから、毫も缺點がなかつたとは言へまい。

三八 江戸に入る

是より先き寶曆九年の二月、江戸の醫師半田氏が白隠を江戸に迎へ

て其の宗風を發揚せしめやうとしたから、其年七月江戸に入りて深川の臨川寺に寓した。臨川寺は大工町の一小寺であつたが、斯様な詰らぬ寺にも白隠の様な名僧が居つたと云ふので、當時一の狂歌が出来た。
名僧をひっこみ町の臨川寺、藪の中にも香の物かな。

藪の中にも香の物」と云ふ諺は、鎌倉時代からあつたものであるが、其の元は、魏の青龍二年に司馬懿が諸葛亮と渭南と云ふ處で對軍して居つた時、司馬懿が文帝に上表して決戦を請うた表文中に、豈知野夫有功者也。と曰うた所から轉化して、斯様な俗諺を産み出したのである。白隠は其の寺で『碧巖錄』を講じて居つたが、其の冬十一月豫ねて約束をして居つたので、時の寺社奉行であつた小出侯の邸宅を訪ひ、一首の狂歌を屏風に書いたと云ふ面白い話がある。蓋し侯は名を英持と云ひ、丹波國園部の城主であつて、延享三年寺社奉行を兼ねたのである。

小出侯ふかく白隠の道風を欽し、しばしば使を遣はしてその邸に請す。白隠すなはち便を得て訪はむことを約す。寶曆己卯の冬十一月、白隠たましく江戸に在り、乃ち約をふみて侯の邸に至る。時に侯外に出で、あらずよつて書院に入りて俟つ。侯の臣屏風を出して書を請ふ。白隠筆をとりて題していはく、小出々々と待つ日にこいで待たぬ日に來て屏風書く侯歸りて大に喜び、之を珍襲して家に傳へきといふ。

〔近世禪林
言行錄〕

さうして此の屏風は恐らく金屏風であつたらうが、白隠は一番小出の荒膽を抜いてやらうと思つて、金色燦爛たる處へ、墨痕淋漓と塗り附けたのであるから、最も奇抜な仕方であつたので、さうして又其の歌もなか／＼振つて居る。かくて十二月には至道無難の遺跡を探つて歸つたが、之は白隠が江戸で宗風を發揚した始めであつた。

其れから六年を経て、明和二年の二月に、東嶺が江戸に下つて小石川至道庵の舊宇を改造し、同年六月再び白隠を迎へた。時に白隠は衰病益々甚しかつたので、松蔭の門弟子等は、皆之を拒んで應せしめなかつた。そこで東嶺は其の冬更に書を發して是等の諸子を諭したけれども、諸子は頑として應せぬ。かくて翌三年の正月に至り、今度は弟子の文恭と云ふ者を遣して之を迎へしめた。其の時文恭は白隠を迎へて箱根に躋り、天野氏の宅に宿せしめた所が、松蔭寺の僧徒四名が其の蹤を逐驅けて來て、其の駕を回さしめやうとした。其の時に文恭は諸子に向ひて、諸禪よりも其の仕方が鄙劣ではないかと言ふと、諸子が言うには、老師は近來非常に衰弱して居らるゝにも關はらず、今遠く江府に誘はるゝと云ふことは解らない。恐らくは益々疲勞を増さるゝであらう。況して老師が他に行かれたならば、吾人化下の諸君は誰を依止とするのか。文

恭之は暫時の養病であつて、老情を扶持する一の方便であると、遂に鶴を護りて江戸に入り、澁谷の東北寺を経て、二月至道庵に進んだ。白隠は至道庵の改築が粗ぼ完備して居つたのを見て大に悦び、是から凡そ半年許りも住して居つたが、時に峨山と云ふ者が來て、白隠に參見し、三度まで其の竹篋を食つたと云ふことである。峨山は諱を慈棹と云ひ、陸奥の人であつて、高乾寺の月仙に就いて剃髮し、それから豊前、日向、丹波等を歴遊して、三十餘人の智識に參見して皆印可を蒙り、後ち武藏永田の永輝庵に歸りて月仙を省した。月仙も深く之を器重して、最早他に參問することを許さなかつたが、偶ま白隠が江戸に來たことを聽き、月仙に秘して竊に參謁したのであつて、時に年四十であつた。後峨山は此の時の事を記し、且つ白隠を評して曰うた。吾は他の道德が尊大であつたのを貴ばない、他の聲名が四海に洋溢して居つたのを貴ばない、他の見處

が古今に超過して居つたのを貴ばない、他が古人節用の諸因縁に於て一々明了に一々見徹して毫髪も遺さなかつた事を貴ばない、他の横説豎説獅子吼無畏であつたのを貴ばない、他の三百五百乃至七八百の徒衆に圍繞せられて一佛出世の様であつたのを貴ばない、唯だ天下の老和尚が吾を奈何ともし得なかつたにも係はらず、他が獨り能く悪手脚を下して、吾をして三度棒を喫せしめ、吾をして進退維れ谷らしめ、吾をして遂に大事を了畢せしめたのを貴ぶと、此の層々たる賛辭は、丁度灌頂と云ふ人が其の師の智頭を讚嘆したのに髣髴して居り、又峨山が三度まで打たれたと云ふのは、宛も臨濟が黃檗の痛棒を三度まで喫したと云ふのと酷似して居つて、甚だ面白いのである。それから峨山は松蔭寺に行つて白隠の室に投じたが、白隠は最早老衰して居つて、入室も思ふ様に出來なかつたから、東嶺や遂翁に就いて多く參究したのである。

斯様に峨山は白隠の晩年に參じ、白隠傳中では顯はれて居ないが、其の門下に卓州と隱山との二弟子を出し、白隠の法燈をして今日に照續せしめたと云ふ要關に當つて居るので、今日から見れば頗る重要な位置に居ることゝなつたのである。それで余は東嶺遂翁と共に之を鶴林門下の三傑であると言はうと思ふのである。却説白隠は其の年六月、東陽英朝が雪江宗深の提唱を聽いて筆記した『碧巖錄』を繕寫させ、之を長壽寺で講じたのであつたが、此の書は愚堂から至道に傳へたものであつて、本派では特に貴重せられて居るものである。

抑も至道庵は至道が寂してからは、次第に廢頽して居つたのであるが、當時白隠や東嶺の力で復興せられたのであるから、二師を同庵の中興として居たのであるが、其の以後も亦漸々衰微したものと見え、遂に其の境地に在つた至道と正受と白隠と及び其の他の人の墓は、明治三

十三年四月に、同區小日向茗荷谷町一番地德雲寺の境内に移された。其の中央に在る矮陋な五重の石塔が至道の墓であつて、其の左右に各一塊の小石を置いて、木塔を立てたのは、右のが正受の、左のが白隠のである。さうして此の下には各石造の骨櫃が埋められてある。其の蓋面に刻されてあつた銘に依ると、至道のは其の百年忌即ち安永四年に澁谷の東北寺から分塔せられ、正受のは、天明元年に飯山の正受庵から移骨せられ、同三年に白隠の分骨と同時に共に收塔せられたのである。さうして至道のと正受のとは方一尺の單なる石櫃であるが、白隠のは特に鄭重であつて、三重となり、外櫃は方一尺八寸、内櫃は方一尺である。是等は皆白隠寂後の事であるから、恐らく東嶺の仕事と察せらるのである。かくて至道庵の故堂は明治四十一年迄殘つて居つたが、其の年廢毀せられて、堂に祠られてあつた辨才天と大黒と惠比壽との三尊と、至道と

白隠と東嶺との三木像と及び白隠の筆蹟である。至道庵の額とは今は谷中の勸善院に移されてある。右の額は白隠が此の時分書いたものであらう。それで今は戸崎町四十四番地に其の遺址を留めて僅に一片の菜園となり、數畦の青蔬が漸々として昔に變らぬ緑の面影を偲ばせて居る。之を見る者は、彼の箕子の麥秀の歌を聯想せずには居られまい。麥秀漸兮、禾黍油兮。彼狡童兮、不與我好兮。かくて白隠は其の年七月東北寺を経て相模に入り、三島の福聚寺の請に應じ、其の冬松蔭に還つた。

三九 大吽一聲

明和四年伊豆古名の温泉に浴し、悠々自適して八十餘の老軀を養ひ、十月龍澤寺で『荆叢毒藥』を講じ、翌五年正月龍澤寺で春を迎へ、元旦の祝

詞を唱へて曰うた。

逍遙龍澤最峯頂、今曉特張舊厚顏。
八十老僧逢歲正、生憎隻手音聲關。

又高聲に呼んで曰うた。

老僧今年八十四、じやがこの様な正月に逢うたことにはない。是も東嶺和尚の御蔭なり。目出度や、目出度や。

復徳樂寺の請に應じて、『荆叢毒藥遺編』を講じ、三月松蔭寺に還る。六月靈元天皇の尊牌を龍澤寺に迎へたので、七月安牌の供養を修し、其の月十五日松蔭寺に還り、冬、河西の大乘寺や、由井の常圓寺で法施し、十一月に松蔭に還り、是から衰病愈々篤くなり、十二月七日、古郡氏が、其の脈を診して、異状なしと言うと、白隠は呵して言うた。三日以前に人の死を知らないで、何うして良醫と謂ふことが出来やうかと。十日、後事を遂翁に

囑し、十一日曉旦右脇にして安眠高臥し、大吽一聲して化した。世壽は八十四で、僧臘は七十である。松蔭と龍澤と無量との三寺に分塔した。越えて六年六月八日、神機獨妙禪師の諡號を賜はり、明治十七年五月二十六日、正宗國師の號を追諡せられた。

白隱には別に鶴林又は闡提と云ふ號がある。鶴林は松蔭寺の山號である。鶴林から轉化し、闡提は元來室號であつて、白隱の汪々たる氣象を現はしたものであらうが、この闡提と云ふことには二様の意義があつて、一は眞の闡提で、眞實に佛になれない者、二は假の闡提であつて、人類を救濟せんが爲めに敢へて佛とならないで、菩薩の位地に在る者である。白隱の所謂闡提は此の第二の意義に當るものであらう。白隱は初め巖頭の傳を読み、禪宗を以つて取るに足らないとし、次ぎに越後の英巖寺で大悟徹底して、巖頭の萬歳を叫び、今茲に大吽一聲して去つた。巖頭

は元來豪毅卓拔な人であつて、白隱の氣象識見と酷似して居つたのであるから、余は亦白隱を呼んで日本の巖頭であると言はうと思ふ。翻つて白隱の生涯を通觀すると、幼時から頗る熱烈な眞面目な性格であつて、其の元氣の旺盛であつたことは實に其の特點であつた。それから人と大分違つて居つた點は、一旦松蔭寺に住してから死ぬ迄五十餘年と云ふ長い月日の間に、一回も松蔭寺を去つて他山に住しなかつた事や、無量寺や龍澤寺は皆門弟子の手に成つて自ら開創した寺院と云ふものは一ヶ寺も無かつた事や、また其ればかりでない、彼れ程に偉かつた人でありながら、一步も朝廷や幕府に入つた形跡を留めなかつた事や、當時の諸侯からは播鉢位は貰うたであらうが、其の他に格別大した物を受けたことを聞かなかつた事や、是等の事は、白隱が今日から偉大な人物であつたと想像せらるゝにも係はらず、當時多